
盜賊プレイブ@獣ウィルス蔓延中

プレイブ&秋留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊ブレイブ@獣ウィルス蔓延中

【Zコード】

Z0332D

【作者名】

ブレイブ＆秋留

【あらすじ】

【ブレイブシリーズ2】魔族デールの館に向かったブレイブと秋留だったが、そこで見つけたオリハルコンと言う鉱石は、高価すぎて小さな村では買取れないと言つ。そこで一行は港町ヤードを目指し旅立つた。しかし、途中の街道で獣人に襲われ……。

プロローグ

湿気を帯びた地下通路で辺りの罠を解除しながら慎重に進む一人の冒険者。

一人は一流の盗賊である、この俺ブレイブ。そして俺の後ろをついて来ているのが、美の神とも噂されている幻想士の秋留。俺と秋留は、崩れ去った洋館の瓦礫の下に地下通路への扉を発見して、今こうして探索している真っ最中だった。

「それにしても、ジメジメしてて気持ち悪いな」

俺は茶色のシャツの襟元を緩めながら秋留に言つた。ダークスースの下のシャツは既に汗でぐつしょりと湿つている。さつとお宝をゲットして、シャワーを浴びたいものだ。

「だね～。冷たい力キ氷が食べたいな～」

秋留が額にうつすらと汗を滲ませながら答えた。この薄暗い通路でも秋留の身体の隅々まで確認出来るのは、盗賊としての俺の力だ。秋留は亞細亞大陸で流行の黄色いチャイー服といふ洋服に、緑の肩当てと膝当てを装備している。

また、腰から下に垂れた布の下には、太腿まであるピッタリとした黒いスパッツを穿いていたため、秋留の引き締まった太腿の形が手に取るよう分かる。

「うつ！」

秋留の身体を凝視していると、突然俺の目の前に真っ赤な刃が出現した。

「ほらほら。ブладー、落ち着いて」

秋留の背中に装備されている真っ赤なマントの一部が、鋭い刃と化して俺の目の前に迫っていた。

秋留は以前とあるダンジョンで見つけた、ブラッドマントという装備した者の首を絞め殺してしまつモンスターを、巧みな話術により手懐けている。

ブラーードーは秋留の事を神の様に崇め、近づいてくるモンスター や俺の様な善良な市民を威嚇し続けていた。

最近はブラーードーも俺の事を認めてくれたらしく余り威嚇して来なくなつたが、俺が少しでも邪まな気持ちで秋留を凝視したりすると、途端にその身体を刃と化し俺に襲い掛かつてくる。

「いい加減に俺の事を認めて欲しいもんだな……」

俺は秋留から視線を外し、辺りに罠がないか確認しながら呟いた。「そのいやらしい目線を止めれば、ブラーードーも認めてくれるんじゃない？」

秋留の手厳しい一言を肯定するかの様に、風のない地下道の中で真つ赤なマントが揺れた。

俺は秋留の僕一号のブラーードーを無視して地下道の先を観察した。薄暗くて余り鮮明には確認出来ないが、数十メートル程先で通路は終わっているようだ。

「待つて！」

俺が一步を踏み出そうとした時、突然後ろから秋留が叫んだ。俺は咄嗟に危険を察知して、半歩ほど後ろに下がつて辺りを観察した。「マジック・トラップだよ」

秋留が俺の横に立ちながら言った。マジック・トラップとは読んで字の如く、魔法の罠であり、ある程度魔力のある者でないと発見する事も出来ない代物だ。

俺は先日こここの持ち主が仕掛けたマジック・トラップに掛かつたばかりだった。その持ち主には、俺が仕掛けた『死』というトラップに引っ掛かつて貰つたが。

「どうする？」

俺は隣の秋留を見ながら言った。少し困った顔もとても魅力的で可愛い。

「残念ながら、魔法の罠に気づいても私やブレイブじゃ解除は無理みたい……」

お宝を田の前にして引き下がる訳にはいかない。

俺はベルトの両側に取りつけているホルスターから金色に輝く銃、ネカーと銀色に輝く銃、ネマーを両手に構えた。

直接トラップを踏んで発動させるのは危険過ぎる。少し離れた場所から俺の銃でトラップを発動させれば、あるいは何とかなるかもしれない。俺は秋留に下がる様に言つと、トラップに銃の照準を合わせた。

「ん？」

後方から獸の息遣いが近づいてくるのを感じた俺は、トラップに向けていた照準を後方の闇へと向け、ネカーとネマーのトリガを同時に引いた。

それぞれの銃口から暗闇でも小さく輝いている硬貨が飛び出す。打ち出された硬貨は高速で回転しながら、闇の中を近づいてくる獸へと突き進んだ。

「ヒヒーンッ」

肉片が飛び散る音と獸の鳴き声が同時に響く。鳴き声からすると馬型のモンスターだろうか。とりあえずは一件落着……。

「ヒヒヒーンン！」

俺の銃は確実に馬型モンスターに命中したはず。しかし、暗闇の中から突然、闇を切り裂くように真っ白い馬が秋留に飛び掛った。俺は秋留に当たらない様にネカーとネマーの照準を目の前の馬に合わせた。

「あ、銀星じやーん！」

と、目の前で倒された秋留がモンスターの取れ掛けた頭を撫でた。

秋留の忠実な僕二号の銀星。その正体はアンデットである。前回の冒険で、ここから少し離れた町にその他数人の野郎共々、置いてきたはずなのだが……。

「秋留殿に、プレイブ殿、心配しましたぞ」

死馬の銀星が現れた暗闇から死臭を放ちながら近づいてきたのは、秋留の僕二号である聖騎士ジェットだった。

ジョットも銀星と同じくアンデットである。生前は、今いるチハンバー大陸の英雄と噂されていたたダンディなオッサンだ。

全身をシルバー系の装備で統一し、腰には秋留から手渡されたマジックレイピアという武器を差している。

「結局、全員集合かよ……」

俺は秋留と一人つきりの時間が終了した事を実感しつつ、両手に構えたネカーとネマーをホルスターに戻した。俺の口から溜息が漏れる。

「ブレイブは溜息なんてついてないの！ あれ？ そう言えば、カリューはどうしたの？」

秋留が辺りを窺いながらジョットに聞いた。それに対し、秋留お嬢様の執事と化したジョットが素早く答える。

「カリュー殿は地下道への入り口付近で見張り中ですじや」

生真面目で熱血漢な我らパーティーのリーダーであるカリューらしい行動だ。あの堅苦しい頭とこんな薄暗い地下道で一緒にならなかつただけでも良しとするか。

いや、隣で異臭を放つジョットと銀星に比べたら、口うるさいだけのカリューの方がマシだつたかもしれない。

俺は追加された野郎二人の事は忘れて、再び目の前のマジック・トラップがあるらしい地面を見つめた。そこで俺は名案を思いついた。

俺の持つ一丁の拳銃ネカー＆ネマーは、硬貨を打ち出すという一般に売られているのを見た事のない珍しい銃だ。回転しながら突き進む硬貨は、普通の銃弾の威力よりも上かもしない。

しかし、欠点もある。

硬貨をネカー＆ネマーでぶつ放してしまって、使用した硬貨は変形して使えなくなってしまうのだ。

金大好きな俺としては、金を無駄にしたくはない。俺はジョットに一声掛けた。

「ジョット！ ちょっと、あの辺に進んでみてくれないか？」

俺は前方のマジック・トラップがあるらしい場所を指差してジヒツトに言った。

「ほう、任せてくれた。このゾンビとしての力を見せる時が来ましたかな？」

そう言つと、ジエットは軽く息を吸つて歩を進めた。

「プレイブも酷い事するよね。ジエットが少し可哀想だよ」
秋留が俺の隣に来て呟く。秋留はそうは言つてゐるが、ジエットが行く事を止めはしなかつた。つまりは同罪だ。

ちなみにジエットは死人であるが、痛みは感じるらしい。「生前の記憶が残つているから」というのがジエットを死人として復活させた秋留の言葉だが……。

「何も起きないようです！」

前進して足元を確かめたジエットが、近くの岩場の陰に隠れていった俺達に手を振りながら言つた。

俺は辺りを見渡して安全なのを確認してからジエットの傍へと近づいた。俺の後ろを秋留と銀星がついて来る。
ジエットの隣まで来ると秋留がしゃがんで、ジエットの足元のマジックトラップを調べた。うんうんと頷きながら地面を触る。

「私、マジックトラップの知識はあんまり無いんだけど、この罠は主が死ぬと魔力の供給が無くなつて発動しなくなるみたいだね」

秋留が両手を払いながら腰を上げた。振り返つた秋留の顔は、障害が無くなつた事により輝いている様にも見える。さすが元盗賊と言つたところか。

「じゃあ、お宝田指して前進再開だな」

俺はそう言つと気合を入れて辺りを再び觀察し始めた。

未熟な頃は一つのトラップを解除した喜びで気が緩み、すぐ後に罠に掛かってしまう事がよくあつたが、今では立派なベテランの人だ。そんなケアレスミスは冒さない。

暫くして目の前に立派な宝箱が三つ現れた。一つ一つ罠がないかを確認する。

一番左は問題無さそうだ。念のため、盗賊技術で開錠した宝箱をジエットに開けてもらひつ。中には硬貨がギッシリと詰まっていた。この館の元主が、森を通る旅人を殺して奪つたものだろう。

次に右側の宝箱の開錠に取り掛かる。中々複雑な錠の様だが、懷から取り出した針金を鍵穴へ差し込むと簡単に開錠出来た。これも蓋はジエットに開けてもらひつ。

「おお！ これは……」「

ジエットが中を確認して感嘆の声を上げる。ジエットが箱の中から一本の短剣を取り出した。と、同時に俺は隣に居た秋留を地面へと突き倒す。

地面に倒れた俺と秋留の頭上を、風を切る音と共に数本の槍が飛び交つた。

「い、痛いですじゃ……」

「ヒ、ヒヒーン……」

ジエットは胸に、銀星は腹を一本の槍に貫かれ、涙目ながらに人と一匹は呻いた。

俺は秋留の手を握り、立ち上がりながらジエットに言った。「どんな罠が仕掛けられているか分からんだから、簡単にアイテムとかには触るなよ

「す、すまんですじゃ……」

ジエットは胸に刺さった槍を引き抜き、地面へと放り投げた。空洞になつたジエットの胸から向こう側の景色が見える。

暫くすると、複数のミミズが動くようにジエットの傷が塞がつた。俺は気を取り直して、真ん中にある本命の宝箱へと近づいた。その間、俺の後ろでジエットと秋留が右側の宝箱から手に入れた短剣をしげしげと眺めながら、何やら話している。

真ん中の宝箱にはいくつかトラップがありそうだ。俺は目の前の宝箱に神経を集中させた。周りの声は一切聞こえなくなる。

俺は慎重に一つ一つ罠を解除していく。引っ張ると爆発するであろう紐を切つた後は、外れると弓矢が飛んでくるバネを取り外す。

集中しているせいでどれ程時間が経過したのか分からぬが、俺の額から汗が一、三滴垂れた。

「ふう！」

俺は中腰にしていた身体を起こすと軽く伸びをした。畠は完璧に外した。間違いない。

最初の一一つの宝箱はあまり期待していなかつたからジェットに任せたが、最後のこの宝箱を開ける役目は誰にも譲れない。

宝箱の開く錆びた音が地下道に響く。宝箱の中からはドリゴンの象が現れた。大事そうに台座に置かれている。

隣から覗いていた秋留が少し興奮しながら言った。

「これ、オリハルコンだね！」

地上に存在する鉱石の中で最高の硬度を誇るオリハルコン。そんな貴重な金属で作られたこの像は、頭の大きさ程のサイズだ。一体、売つたらいくらになるのだ？

「さて、用も済んだ事だし、こんなジメジメした地下道からはとつと脱出しよう！」

俺は手に入れた像を鞄に入れると、重さで肩に食い込むのを我慢しながら、今まで進んできた道を引き返した。

「随分遅かつたじゃないか」

外に出た途端に、不機嫌な顔をしている我らがリーダーのカリューが言った。空を見上げると、太陽が西に沈みかけている。辺りには涼しい風が吹いており、汗で湿つた身体を優しく癒してくれた。

「おい！ ブレイブ！ 空を見上げて放心状態になつてるんじゃない！」

俺は舌打ちをしながら、現実を見つめなおした。

田の前には真面目さを現しているかの様な真つ青な髪に、全身青を基調とした鎧を纏つたカリューが立つてゐる。背中には銀色に輝く剣を下げていた。その剣の鞘が太陽の光を浴びて、美しく輝いてゐる。

「今日は収穫が多かつたから許してよ、カリュー？」
秋留がカリューに言い聞かせる様に言つ。

「おう！ 許す！」

「ふざけんな！ 何でブレイブが返事してんだよ」

秋留のお願いに思わず答えてしまつたようだ。カリューが眼を血走らせながら俺に向かつて叫んでいる。

「悪を滅ぼすための新しくて強力な武器が買えるよ？」

正義しか頭にないカリューを頷かせるには十分の内容だった。しかも、色々な職業に就いた事のある秋留の声にはどこか魔力を感じる。

カリューの眼が秋留の言葉によつて、輝きだした。

「そうだな！ 悪を滅ぼすためには強力な武器が必要だもんな！ 秋留もブレイブもご苦労だつたな」

満足したカリューは俺達を引き連れると、現在滞在しているジョン・アンダーソン村に向かつて歩き始めた。

「すっかり暗くなつてしまつたな」

ジョン・アンダーソン村に向かう途中の街道で、カリューが辺りを見渡しながら言つた。付近には障害物が大して無く、もしモンスターに襲われそうになつてもすぐに気付くだろう。野宿には十分な場所だ。

俺達は馴れた手つきで、銀星から降ろした荷物からテントや非常食を取り出すと、野宿の準備をした。

野营地の真ん中に火を起こし、俺達はそれぞれ円になつて食事を始めた。今日のメニューはジャガイモのスープに乾パン、あと乾燥肉の炒め物だ。今日は色々と神経を使ったので腹が減つている。

あつという間に平らげると、炎を囲んだパーティの顔を一人一人観察し始めた。盗賊という職業柄なのか、常に何かを観察していないと落ち着かないのだ。

まずは、俺達パーティー紅一点の秋留。職業は幻想士で歳は俺よ

り一つ下の一十一歳。飽き易い性格のためか、過去に様々な職業に就いた事があるらしい。

何種類もの魔法を使い分ける事が出来る天才肌だ。俺達パーティの頭脳役でもある。過去に盗賊になつた事もあるという情報をつい最近仕入れた。

秋留の事をあまり凝視していると秋留の背中のブレードが反応するので、これくらいにしておこう。

俺の左隣に座っているのが、一応このパーティのリーダーであるカリュー。歳は俺より二つ上。何度も言つようだが、熱血生真面目人間で、物凄く付き合い難い。

しかし、そんな真面目腐ったカリューも一点だけおかしなところがある。職業は自称勇者なのだ。

本来ならガーナ王国という小さな大陸にある国で勇者としての称号を受けて、初めて勇者となるはずなのだが。

自称という証拠にカリューの瞳は真っ黒だ。本当の勇者の瞳は金色に輝いているらしい。

「？ 何か俺の顔についているか？」

カリューが食べ終わつた皿を地面に置いてから聞いてきた。俺はカリューの質問を無視すると、右隣に座つているジェットの姿眺めた。

聖騎士ジェット。コースト暦一九九九年の第三次封魔大戦で魔族連合軍の軍団長の一人、マクベスを討ち取つたとされるチエンバーグ大陸の英雄だ。

エアリードの町で相棒の銀星と共に生涯を終えたジェットを蘇らせたのは、他ならぬ秋留だ。秋留はネクロマンサーの職業に就いた事があり、死者を操る事も出来る。

ちなみに、生きていればジェットは百十六歳という事になる。ゾンビとは何とも複雑な存在である。

複雑と言えば、俺は今までゾンビはドロドロというイメージがあつたが、ジェットは普通にしている限りは、生身の人間と大して変わらない。

わらない。臭いは別として。

ジエットも銀星も普通に食事をするし、夜になつたら寝てしまつ。

一般的な老人同様に夜寝るのが早くて起きるのも早い。

時々ゾンビといつ事を忘れてしまつくらいだが、臭いを感じて現実に引き戻される。

「ふわあああ……」

俺は欠伸をしながら大きく伸びをした。身体の関節がボキボキッと鳴つた。

「そろそろ寝ますかな？」

ジエットが眠そうな目をしながら言つた。少しでも早く寝袋に入つて寝たいという気持ちをアピールしている。

秋留、ジエット、俺、カリューの順に一時間毎に見張りに立つ事にして、俺達は眠りについた。

翌朝早く、暑くなる前に俺達は野営地を出発した。今日の昼くらにはジーン・アンダーソン村に到着するだろう。

「今日も暑くなりそうだね~」

秋留が空を見上げながら言つた。つられて俺もカリューも空を見上げる。雲一つ無い青空が広がつていた。

「ヒヒーン」

主人のジエットが秋留しか背中に乗せない工口死馬の銀星が鳴く。

「頑張れよ、てめえら！」と俺とカリューに言つているようだ。

それから数時間、真昼の暑さに耐えながらジーン・アンダーソン村に着いたのは、午後の三時を回つた時だった。今回は急ぐ移動ではなかつたのでだいぶ時間がかかつたな。

「じゃあ、俺は宿を取つてくる。戦利品は金の亡者のブレイブに任せることよ」

俺が反論する間もなく、カリューは村の大通りを歩いていった。後ろからネカーとネマーで狙つてやうつかと思ったが、硬貨がもつたないので止めておく。

しかもカリューの事だから人間離れした野生の勘で、後ろから飛んでくる硬貨を軽く避けるかもしない。

「ジェットは消耗品の買出しをお願いね。私とブレイブとで鑑定屋に行つて、手に入れたアイテムを見てもらひよ」

秋留の嬉しい申し出に俺は笑顔でジェットと銀星に手を振った。

銀星の悔しがつている顔が心地よい。

俺と秋留は一人で仲良く、ジーン・アンダーソン村にある唯一の鑑定屋、ルツク目指して歩いていた。秋留と二人で街中を歩けるなんて、俺は何で幸せなんだろう。

「あ、ここだね」

秋留が数メートル先の看板に指を差しながら言つた。着くのが早過ぎる！ これじゃあ秋留と全然話も出来ない。

そもそもジーン・アンダーソン村は規模的には小さい方なので、村の端から端まで歩いても十分位で着いてしまう。うかつだつた。

俺が一人で自分の頭を叩いていると、秋留は無視して鑑定屋の中に入つていった。俺も慌てて鑑定屋の中に入る……。

「で、どうだつたんだ？」

カリューが向かいのベッドに腰掛けながら聞いてきた。

ここは、この村にある中で一番良いと噂の宿屋リフレッシュ・ハウスの一室。実は、先日までこここの宿屋に泊まつていたので、店の主人とも顔馴染みだつたりする。

「この村では、オリハルコンで出来てゐる様な高価なアイテムは買ひ取れないそうだ」

俺は残念そうに言つたが、心中では両手を挙げて喜んでいた。

小さな村では買ひ取れない程のお宝という事が決定したからだ。

一緒に見せにいった短剣には魔力が込められているという事だつたが、この村の鑑定屋の主人では細かい鑑定までは出来ないらしい。

「どうするんですかな？」

ジーツトが少し眠そうな顔をして聞いてきた。

「ここの村での依頼も大した物は無さそうだし、手に入れたアイテムの鑑定のためにも、もっと大きめの町に移動した方がいいかもね」秋留は愛用している杖にぶら下がっている、堕天使の人形をもてあそびつつ言った。

この街から比較的近くで大きい町と言えば、港町ヤードだろう。俺達はそれから暫く話し合つて、明日の昼くらいにこの村で馬車を買って、港町ヤードを目指す事を決めた。

「さて、寝ますかな」

ジーツトが待つていましたとばかりに言つ。

明日の出発に備えて俺達は早めに眠りにつく事にした。

ちなみに、秋留は俺達とは別の部屋で寝るためにこの部屋を出て行つてしまつた。一緒に部屋でも俺的には全然問題ないのだが……。

第一章 暖かい街道

「誰だよ、雨男は……」

俺はカリューの顔を見ながら呟いた。一方、カリューは余りの蒸し暑さのためか、反論する気力も無い様だ。

「さすがに少し蒸し暑いですな」

ジエットはシルバークロスの装備を少し緩めにして蒸し暑さを耐えている。

そもそも死人に体温があるのだろうか。ジエットや銀星の事を見ていると、ゾンビという存在があります分からなくなる。

その銀星は、ジーン・アンダーソン村で買ったメス馬と、俺達の乗っている馬車を仲良く引っ張っている。危ないから前を見て馬車を引いてくれ……。

俺達がメスの馬と一緒に購入した馬車には簡易的な幌がついているが、今みたいな土砂降りの雨にはほとんど役に立たない。

俺やカリュー、ジエットは、フードつきのマントを被つて雨粒を防いでいた。

秋留はと言ひうと、同じくマントを羽織っているが、マントが傘の様に形を変えて雨粒からご主人様を守っている。

「今日はあんまり無理しないうちに野宿した方が良さそうだね。アレキサン德拉にも無理をさせたくないし」

アレキサン德拉とは、銀星の隣で馬車を引っ張っているメスの馬の事だ。買ったその場で秋留が名前を決め、アレキサン德拉自身もその名前が気に入つたらしい。

俺は馬車から辺りを見渡した。仲良し馬カッブルも雨宿り出来るような、少し大きめの洞穴でもあれば良いのだが。

暫く進むと林を抜けて、小高い丘が見えてきた。その丘の頂上に大きな木が生えているのが見える。あの木の根元なら雨をじのぎながら野宿が出来るだろう。

カリューが手綱を操り木の下まで馬車を移動させると、早速野宿の準備を始めた。完璧に暗くなつてからでは準備がし難くなつてしまつので、のんびりはしていられない。

俺達は効率よく二つのテントを設置すると、木の根元に火を起した。この火は暖を取るためではなく、暗闇から襲つて来るモンスターを防ぐためだ。

俺はジェーンアンダーソン村で買つたソーセージを木の棒に刺し、焦げないように火の回りで焼いた。辺りに良い匂いが立ち込めてくる。

近くを探索していたカリューは小型の猪を捕まえて帰ってきた。銀星はソーセージの焼ける匂いにつられて帰つてきたようだ。カリューが素早く猪を解体して、料理担当の秋留に渡す。

「簡単に塩コショウでステーキにしようね」

秋留が鼻歌交じりで鉄製のフライパンを火で暖め始めた。可愛い。結婚したらこんな幸せなシーンを毎日見れるんだろうなあ。

「今日は雨のせいだ、あんまり進めなかつたね」「ぼけ〜つとしている俺に秋留が突然話しかけてきた。

「そ、そうだな」

俺は危険な妄想を遮られて大した返事も出来なかつた。

俺達は火を囲むようにして近くの大き目の石に腰を下ろしている。火の中の肉から良い匂いが漂つてくる。

「明日は晴れると良いんだけどな」

秋留の問い掛けに俺は慌てて補足した。

秋留の料理姿を眺めているうちに肉が焼きあがつたようだ。俺達は秋留から手渡されたデカいステーキの乗つた皿を渡された。

「それじゃあ食べよつか

『『『

「ですじゃ

俺達は声を合わせて肉を食べ始めた。新鮮な肉に秋留の旨い味付け。最高だ。

そして右手に持った前菜のソーセージもほおばる。ハーブの入ったソーセージの香りとジューシーな肉汁が口一杯に広がった。これも旨い。

「港町ヤードはまだまだだからなあ。街道沿いに休憩出来る場所とかがあると良いんだけどな」

そう言ってカリューは広げた地図の街道沿いを指でなぞっている。カリューの独り言は放つておいて俺は口の中のソーセージを味わつた。

俺達は雨の中での慣れない馬車の移動に疲れたのか、その日は終えてからすぐに眠りについた。

「まさか一連チャンとはな……」

カリューがうんざりした声で言つた。夜の見張りの最後であるジエットに起こされた俺達は、悲しい現実を目の当たりにした。空は暗く、昨日よりは弱くなつたが相変わらず雨がポツポツと降つている。

「がつかりしていてもしょうがないな。蒸し暑いのは我慢して早速出発しよう」

俺達はカリューに促されて、眠い目を擦りながら野宿の片づけを済ませた。アレキサンドラと銀星が馬車を引き始める。

馬車に揺られること約一時間……。俺の耳は雨の音に混じつて何者かの息遣いを感じた。馬車の周囲を見渡し、ネカーとネマーを構える。

俺の警戒に気づいたのか、秋留とその他も武器を構えて辺りを見渡し始めた。

「どこだ？ ブレイブ！」

カリューが右手に剣を、左手に盾を構えながら聞いた。雨の音と馬車が揺れる音で、正体不明の息遣いがどこから近づいてくるのか分からない。

突然、カリューの脇をかすめて馬車の荷台に矢が突き刺さつた。

上を見上げると馬車の幌に穴が開いている。その穴から一瞬だけ何かが横切つたのが見えた。

俺は荷台から身を乗り出して頭上を確認した。俺達の馬車のすぐ上に馬位の大きさの翼を持つモンスターが舞っているのが見える。ネカーとネマーから咄嗟に放った硬貨がモンスターの脇をかすめた。馬車の揺れと視界の悪い雨のせいで若干照準が狂つたか！

「ピギヤア」

奇声を上げてモンスターが上空に逃れる。

「！」

俺は再び飛んできた矢を避けた。危うく足を貫かれる所だつた。

「ブレイブ、秋留、しつかりしてくれよ！」

カリューは側面の幌を手で広げ、辺りを警戒している。近距離攻撃しか出来ないカリューの癖に偉そうだ。

「うーん、ブレイブ、頑張つて。私じゃあ、この視界の中を飛び回るモンスターに魔法を当てるのは至難の業だよ」

秋留の声援に一気に力が溢れってきた……気がする。

俺は再び近づこうとしているモンスターに照準を合わせようとした。

奴は俺の攻撃の範囲に入らないように器用に飛び回つている。知能の無いただのモンスターには無理な動きに思える。

「舐めるなよ、モンスターの分際で……」

俺は幌の天井に手をかけた。そして勢いをつけて馬車の屋根に飛び乗つた。そして片手で天井の金具を掴む。これで布で出来た幌の上でもバランスを保つことが出来る。

「もう逃げられないぞ！」

視界が広くなつたため、モンスターの動きを眼で追う事が出来るようになった。

モンスターは意を決したかのように俺に突撃してきた。

俺は落ち着いてネカーとネマーのトリガを引く。俺の横を腹に大穴を空けた真っ赤な翼を持つ蛇の様なモンスター、バアグが落ちて

「いつた。

「やつたか？」

カリューが荷台から身を乗り出して空を確認した。

「安心しないで！ 矢を射つた奴がまだいるはずだよ！」

秋留が叫ぶ。確かに手足のないバーグでは「矢を構えるのは不可能なはず。

次の瞬間、俺の後方に何かが落ちてきた。俺は咄嗟に後方を振り向こうとしたが、後方に何かが落ちてきた衝撃で幌が大きく揺れていて身動きが出来ない！

「はっ！」

御者席から離れたジェットがレイピアを天井に突きつけたようだ。俺がバランスを取り戻して後方を振り返った時には誰も居なかつた。「どこだ？」

俺は馬車の屋根から辺りを見渡した。ほとんど音も無く空中から幌に着地する事や、ジェットの攻撃を避けるあたりは、かなりの手練れに違いない。

馬車から少し離れた地面の草が小さく揺れる。道の悪い街道を疾走する馬車から見えた黒い影は、眼だけが不気味に光っていた。

「何だつたのかな？」

何者かに襲われた後、暫く警戒しながら街道を進むこと一時間……。昼近くなり雨も更に小降りになつて来た頃、秋留は言つた。

「魔族か？」

カリューが険しい顔で言つた。魔族とはモンスターを操る存在。出生等は不明だが、人間を食料とし地上を支配しようとする種族だ。その力は並のモンスターなどの比ではない。

「いや、雨の中に浮かんだ眼は、魔族の眼ではなかつたぞ……」

魔族の眼は赤地に黒という独特な目だ。俺が雨の中で見た目は赤地ではなかつた。しかし、人間の様な白地に黒目でもなかつたように見えたが……。

俺達は馬車を街道沿いに止め、遅めの昼食をとった。先ほど雨は止んだが予定より遅れている。

「雨が止むと余計に蒸しますなあ」

ジエットの臭いも強烈になるなあ、と心中で思った。

街道は一応簡単に整備されてはいるが、雨の後はぬかるみが多いため、馬車の速度もそれ程上がらない。

「アレキサンドラが疲れてきてるみたいですよ」

暫く進んでジエットが言った。やはり普通の馬にはこの悪路は走りにくいようだ。

「仕方ない。今日はだいぶ早いが野宿出来そうな場所を探し始めるか」

翌日は曇り、その次は再び雨、次の日は少し青空が見えたと思つたら土砂降り……。

天気に完璧に見放された俺達は大分疲労が溜まつてきていた。銀星がアレキサン德拉の分も頑張つてているようだが確実に馬車のペースも落ちてきている。

「十分に休息が取れそうな場所を探さないと駄目だな」

「でも休憩所はもう少し先なんだよね」

リーダーのカリューと頭脳役の秋留が話し合つてゐる。

俺は軽い嫉妬を抱きながら辺りを見渡した。馬が喜びそうな草原っぽい所があれば良いんだけどなあ。

俺はキヨロキヨロしながら大きく欠伸をした。

「あ！」

丁度、欠伸をしながら空を眺めた時、空を飛ぶモンスターの姿が眼に入った。いや、正確にはモンスターの群れか！

目をつけられないことを祈りながら空を舞うモンスター達の姿を眼で追つ。

どうも様子がおかしい。

先頭を進むモンスターが他のモンスターに襲われているようにも

見える。そういえば、先頭を飛ぶ真っ白の馬のようなモンスターはもしかしてペガサスか？

ペガサスは魔族から作られたモンスターではなく、牛や馬と同じこの世界に元々存在していた動物だ。人間に懐きやすく人を乗せて飛びことも多いと聞いた事がある。

「あ！」

俺は再び声を挙げた。ペガサスと思われる馬が翼に傷を負つて地面に落ちて行つている。

ま。

でも多分金にはならないだろうし、アレキサンドラも限界なため助けに行くのは得策ではないだろう。

と思っていると急降下したペガサスが何とか体勢を立て直し、地面すれすれの高度で俺達の馬車の方へと進んできた。

それは不味い。

ペガサス自体を追つ払おうとネカーとネマーを構えた所でペガサスに乗つている人間と眼があつた。

「ちつ」

さすがに眼があつてしまつたら助けてやるしかないか！ 良く見ればペガサスに乗つている人間は身なりが良さそうだし。

「モンスターが近づいてきてる！ ペガサスに乗つた人が襲われているみたいだ！」

俺は全員に聞こえるように叫んだ。

秋留もカリューも武器を構えて馬車の後方から俺の視線の先眺めた。

「随分、近くまで来てるね」

「そうだな」

カリューと秋留の冷たい眼が俺の顔を睨んでいるようだが気にしない。

俺は攻撃し易いように馬車の屋根に飛び乗つた。さすがに一回目にもなると馬車の屋根も慣れたかな。

ネカーとネマーを再び構える。

今度はペガサスを追うモンスター達に照準を合わせる。

飛行軍団が俺達の馬車を通り過ぎる瞬間に俺はモンスターを三匹打ち落とした。それでもまだペガサスを追っているモンスターは五匹残っている。

「ヒートアロー！」

秋留が御者席から魔法を放った。その魔法が遠ざかるもとしているモンスターの一体を焼き尽くす。後は四匹か。

少し離れたペガサスは急旋回して俺達の馬車を目指して再び近づいて来た。どうやら助けてもらいう氣満々らしい。

再びネカーのトリガを引いてモンスターを一匹打ち落とす。

そして俺と同じように屋根に上つて来たカリューが上空にジャンプし更にモンスターを一匹切り裂いた……そしてカリューは馬車の後方に落ちていった。

「走る馬車からジャンプなんかしちゃ駄目だよ」

秋留が呆れている。

カリューは正義のためを思うと冷静な判断が出来なくなるところが問題だ。

それでも残ったモンスター一匹が執拗にペガサスを追いかけている。

「危ない！」

秋留が叫んだが、俺の銃も秋留の魔法もここからでは命中力も威力も低くなるためペガサスを援護することが出来ない。

しかし俺達の不安を裏切るようにペガサスが大木の前で急旋回して、追つてきていたモンスターが勢い良く大木に体当たりをかました。

「すつご〜い！」

秋留が感動している。

確かに今のペガサスの動きは素晴らしい。しかし、あれは乗り手が凄いのかペガサスが凄いのか、ペガサスに詳しくない俺には

分からぬ。

安全を確認すると俺達は街道傍に馬車を止めた。
遠くから真っ白な毛並みのペガサスとその主が近づいて来た。少し前を無鉄砲カリューも歩いている。不思議と無傷なようだ。どんな身体しているんだ……。

「助かつたぞ」

太陽の位置からすると午後三時といった所か？ 俺達は街道から少し外れた小高い丘でキャンプの準備を始めたところだ。
田の前にはペガサスの主、ゴムレスと名乗った、が石に腰を駆けている。

ゴムレスは真っ白な長い髪に丹精な顔立ちをしている。貴族っぽい高価そうな服を上品に着こなしているのだが……。
ゴムレスっぽくない。

ゴムレスの響きからすると髭がモジヤモジヤで頑丈そうな身体をイメージするのだが、田の前のゴムレスはエルフのように華奢な身体をしている。

しかも女性のようだ。歳は秋留と同じ位だろうか。

俺達は野営の準備を終えるとゴムレスを囲むように辺りに腰を下ろした。

「矢を使い切つてしまつたと……」

リーダーのカリューが干し肉をかじりながらゴムレスを見つめる。
あらかじめゴムレスからなんとなく説明は受けていた。

「ああ、魔族と交戦などしなければ持つはずだつたんだがな」
まさか、こいつが俺達の馬車を襲つた奴ぢやないだろうな？ 俺達も弓矢で襲われたが……こいつ「矢を使い切つた」と言つていたぞ……。

俺は疑いの眼差しでゴムレスを睨みつけた。

俺の疑惑を感じ取つたのか、秋留が隣から質問した。

「ゴムレスさんの武器はボウガンですか？」

秋留の質問に「ゴムレスは背中からボウガンを取り出した。装飾が綺麗で高価そうだ。

「ちょっと前に私達の馬車が何者かに襲われたんです」

「ふむ」

そこで秋留がゴムレスの武器を見つめて俺の方を向いた。
「前に攻撃された時ってボウガンの矢だつた？」

「そつか。

確かあの時は矢の棒の部分が長かつた。明らかにボウガン用の矢では無かつたな。

「疑つて悪かつたな」

俺は素直に「ゴムレスに謝つた。

ゴムレスは嫌な顔をせずに二コリと微笑んだ。

「ゴムレス殿は冒険者ですかな？」

その場を和ませようと、ジェットは熱そうに緑茶をすすりながら聞いた。

「ああ、だが特に依頼中という訳ではない」

「どうも話しつくい喋り方をするな。名前と見た目と話し方が一致しないためだろ？いや、名前と話し方は一致しているのか？ ややこしい。

「今日は俺も同じテントに泊まっていいか？」

男っぽい喋り方のゴムレスを秋留と同じテントに寝かせるのは危険な気がするが、そもそもペガサスは女性しか操れないというのも聞いた事があるしなあ。

俺達は不思議な客と一緒に眠りについた。

ちなみにゴムレスは正体不明なため、見張りの時はモンスターの接近と同じように秋留と「ゴムレスの寝ているテントにも注意を払うことになった。

翌日は久しぶりの雲一つない青空だった。

「それでは世話になつたな。ミズル亭はこの先だつたな？」

「ああ、気をつけてな」

カリューが答える。

こうして冒険者をしていると、他の冒険者を助けたり、他の冒険者に助けられたりする事がある。冒険者同士には色々と「暗黙の了解」がある。ある冒険者が助けを求めているなら他の冒険者が助けるのがマナーだ。勿論、助けられる場合に限るのだが。

「おお、忘れる所だつたな」

そう言つて、ゴムレスがペガサスから降りて銀星とアレキサンドラに近づいた。

「こつちの雄が銀星だつたつけか？　こいつはまだまだ元気そうだが、雌のアレキサン德拉は随分疲れているみたいだな」
ゴムレスがアレキサン德拉を優しく撫でている。

「そう、連日の悪天候で体力を消耗しているみたいなの」

秋留もアレキサン德拉を撫でた。

ゴムレスと若干仲良くなつてゐるのは、昨日同じテントで過ぐしたためだろうか。嫉妬してしまう。

「そこで、良かつたらこの薬使つてくれないか？」

そう言つとゴムレスが背中のリュックから小瓶を取り出した。

「ワンバ用だけきつとアレキサン德拉にも効果があるはずだよ」

『ワンバ？』

俺とカリューとジェットが同時に声を挙げた。秋留は声を挙げない。

「ワンバはこの子の名前だよ」

秋留がペガサスの頭を撫でている。

ワンバ？

どうでも良いがワンバっぽくないぞ。こいつのネーミングセンスはどうなつてゐるんだ？

秋留はゴムレスから手渡された小瓶を開け、中身をアレキサン德拉の身体に振り掛けた。輝く太陽に水滴がキラキラと光つている。

「ヒ、ヒヒイイイイイン」

アレキサンドラが元気にはいなかった。かつたるそつこしていたアレキサンドラの顔にも張りが戻ったようだ。

「ぶるるる」

銀星も嬉しそうにアレキサンドラの顔に頬ずりをしている。

「これで遅れも取り戻せそうかな」

俺は飛び去つていくゴムレスを見送りながら呟いた。

「うはは～！」

秋留が御者席で喜んでいる。

俺達の乗る馬車は晴天の下、物凄い勢いで走つている。
もともとゾンビ馬で体力の底があるのか不明な銀星ならまだしもアレキサン德拉まで……。

「そろそろか？」

カリューがあつという間に流れしていく景色を眺めて呟く。
地図によると、もう少し進めば街道沿いに小さな休憩所があるはずだった。アレキサン德拉とは違い、俺達は蒸し暑さによりだいぶ体力を失っている。早く休憩したいな……。

「おい！ ブレイブ、着いたぞ！」

カリューに肩を揺すられて俺は眼を覚ました。どうやら俺は馬車の心地よい揺れで眠つてしまつたようだ。寝起きにカリューの暑苦しい顔は辛い。秋留に起こして欲しかつた。

「ブレイブはすぐ寝るよね～。うらやましいよ」

秋留が馬車の外から言つた。街道沿いの休憩所に着いたようで、ジェットも馬車の外に立つてゐる。

俺は自分の鞄を右肩に背負うと、馬車から飛び降りた。

「いい天気に続いてくれると良いですね。熱すぎるのも困り者じゃが……」

ジョットが眩しそうに空を見上げて言つた。夏の暑さは相変わら

ず変わつていな。まだ湿氣が残つてゐるせいか、蒸し暑く感じる。左を向くと、大きめの宿屋位の二階建ての建物が目に入った。これが地図にあつた休憩所だろう。

両開きの扉の上には『ミズル亭へようこそ!』と書かれた大きな看板が取りつけてある。今俺達がいる地名がミズルだからだろ。俺達は銀星とアレキサンドラを馬屋へ預けるとミズル亭の扉へ向かつた。

ミズル亭の前では、まだ駆け出しと思われる三人組みの冒険者パーティーが、何やらコソコソと話していた。

俺は耳に集中して会話を盗み聞いた。十メートル程離れて小さな声で話している程度では、まるで隣にいる様に鮮明に会話を聞く事が出来る。それが盗賊としての俺の能力だ。

「おい、あいつら……」

魔法使い風の短髪男が言つた。

「ああ、そうだ……。レッド・ツイスターに違いないな……」

長い髪の毛を頭の両方で団子型にした格闘家風の女が答える。大きめの兜を被つた戦士風の男が驚きの眼を俺達の方に向けた。

実は俺達は一部の冒険者や冒険者マニアの間では有名だったりする。毎月創刊の冒険者クラブという雑誌にも載つた事がある。

レッド・ツイスターとは、とある国でモンスターの大群と戦つた時に、俺達パーティーの戦い方がまるで紅い旋風の様だった、とう事からつけられた呼び名だ。

当時、聖騎士のジェットはパーティーにはいなかつたが、もしジエットも加わつていたら紅い旋風では済まない様な激しい戦いになつていたかもしれない。

俺達は少し遠巻きに見てゐる新米パーティーの傍を悠然と通り過ぎると、休憩所の扉を開けて中に入つた。

「いらっしゃいませ!」

この店の制服と思われる真っ赤な帽子にエプロンをつけた女性が、元気良く俺達を出迎えた。

建物の中をぐるりと見渡すと、この建物自体が色々な店の複合施設なのに気づいた。無難に食事出来る場所もあれば、魔族討伐組合の窓口もある。その隣には散髪屋まであるようだ。

「お、ちょっと俺は地下に行つて来る」

カリューは食堂の横にある下り階段を指差して嬉しそうに言い、歩いて行つた。

下り階段の上の壁に『Bar南』と書かれた看板が掲げられている。

最近知った事なのだが、カリューは典型的な熱血真面目人間なのが根っからの酒好きなのだ。俺がカリューの事を許せる唯一の趣味かもしない。

「おお、ワシも行くですぞ！」

カリューの後を追つて、ジェットも地下への階段を目指して歩き出した。ジェットもカリュー程ではないにしろ酒好きなようだ。

ちなみに俺は最近滅法弱くなってしまったので、酒は飲まないようしている。隣に居る秋留は酒に強いのだろうか？ 今度誘つてみよう……。

「真っ白の髪をした女性が来ましたか？」

秋留が受付の女性に話しかけている。ゴムレスが無事に着いたか確認しているようだ。

「ええ、今朝到着してもう出発されましたけどね。やたらと沢山の武器を買い込んでいたようですよ」

「ふふ、ありがとうございました」

秋留が俺に近づいて来た。

「装備売り場は一階かあ」

秋留が俺の後ろの壁に取りつけてある案内板を見ながら言った。何だ、俺に近づいて来たわけじゃないのか？

「俺も……」

「ブレイブは魔族討伐組合に行つて、この辺で何か変わった事とかないか聞いてみて」

「ブレイブは魔族討伐組合に行つて、この辺で何か変わった事とかないか聞いてみて」

俺に厳しく言い放つと秋留は一階への階段を上って行ってしまった。俺はその姿を眺めながら呆然とすること小一時間……。

「邪魔だよ、兄ちゃん！」

商人らしい恰幅の良いオッサンに後ろから声を掛けられ、俺は振り返つて睨む。しかし童顔な俺の視線では大して威力もなかつたようだ。

俺は気を取り直して魔族討伐組合の窓口に歩いた。

「ようこそいらっしゃいました。ブレイブ様」

さすが魔族討伐組合の社員と言つたところか。俺の顔を確認しただけで誰だか分かつたようだ。

ちなみに魔族討伐組合とは、魔族やモンスターに関する情報を教えてくれる施設であり、冒険者達はこの魔族討伐組合に自分の情報を登録している。

「本日はどうなご用件でしょうか？」

目の前の分厚い度の入つた眼鏡を掛けた男が言つ。

「何かこの辺りの情報とか入つているか？」

俺が答えると、男は手元の綺麗にファイリングされた紙を順番に眺め始めた。

男が言つには、ここ最近街道で旅人や冒険者を乗せた馬車が襲われているという事だつた。俺達を襲つたのもそいつらだろうか。

「さて、どうしようかな」

俺は小さく呟くと大して考えずに一階への階段を上り始めた。俺の姉が二階で待つてゐる！

「あれ？ どうしたの？ ブレイブ」

俺が階段を上りきる手前で、上から声を掛けられた。見上げると右手に小さな紙袋を抱えた秋留が階段から下りてきていた。どうやら買い物は終わつてしまつたようだ。

秋留の買い物が終わるほど、俺は放心していたのだろうか。再び放心しそうな気持ちを押さえて俺は言つた。

「カリューとジェットに声を掛けて、一緒に飯でも食わないか？」

一人きりで、なんて言つてしまつたら断られてしまうのがオチだ。とりあえずムサ苦しい男一人はほつとけば問題は無い。

「うん、久しぶりにまともな食事が取れそうだしね」

俺と秋留は、地下で仲良く陽気になつてゐるカリューとジェットに声を掛け、一緒に一階の食堂へ向かつた。

このミズル地方の名産は黒羊らしく、食堂のメニューも黒羊を使った料理ばかりだ。俺達はそれぞれ遅めのランチを注文すると満腹になるまで食べ続けた。冒険者にとつては、まともに食事を取れる時に取るのが鉄則だ。

「さつき飲み屋で聞いたんだが、三階は休憩所になつてゐるらしいぞ。泊まる事も出来るそうだ」

カリューが赤い顔で言った。少し酔つているせいか、いつもより声が大きい。

「それ程急ぐ旅でもないし今日はここで泊まって行こうと思つけど、どうだ？」

ようするに酒が身体に回つてあまり動きたくない、といったところか。

俺も一階で装備を整えたかつたので、カリューの問い合わせに軽く頷くと秋留の方を見た。

「私も長い馬車の移動で少し疲れたかな。ブレイブと違つて、どこでも寝れる訳じゃないしね」

秋留は欠伸をしながら席を立つと、休憩所を目指して歩き始めた。持つていたグラスの中身を一気に飲み干して、俺は秋留の後を追つた。

食事の会計は金に無頓着なカリューがジェットに任せることにする！もしかしたら、秋留も同じ考え方かもしれない。

その日は疲れが溜まっているのもあって俺は早めに眠りに付いたが、ジェットとカリューは遅くまで飲み合つてたようだ。

翌日は昼過ぎにミズル亭を出発することになった。カリューが一

日酔いで昼近くまでダウンしていたためだ。ちなみにジェットが何事も無かつたかのようにケロッとしているのは、酒に強いためか死人のためかは分からぬ。

日頃の行いのせいか、今日も良い天気に恵まれた。俺の隣にはミズル亭で買い込んだアイテムやら食糧が多めに詰め込まれている。

「しゅ、出発するか」

カリューはあまり元気が無さそうだ。ゲッソリしている。飲みすぎだ、アホアホカリューめ。馬車で吐くなよな！

「港町ヤードまで後一週間といった所ですかな」

「ジェット……今はそういう話は止めてくれ。気が重くなる」

カリューが顔をしかめている。今のカリューがそんなに馬車に揺られたら死ぬだろうな。

その日は途中でカリューのために頻繁に休憩したがモンスターに襲われることは無かつた。

冒険は順調に進んだ。

冒険者の移動や馬車が時折通る安全な街道を走っているため、モンスターも襲つてこない。モンスターは基本的に人通りの多い場所には警戒して出現しない。稀に集団となつて街道を襲うこともあるのだが、今の所大丈夫そうだ。

ちなみに魔族はどんなに人が沢山いようが、おかまいなしの場合も多いが……。

そしてミズル亭を出発して六日目の朝。

俺達はいつも通り早めに出発するとヤードを目指して進み始めた。予定通りに行けば今日中に港町ヤードに着くはずだ。

「ダチョウみたいなモンスターが追つ掛けてきますぞ」

出発して暫く経つた頃に、後方を眺めていたジェットが言った。ダチョウを二倍程に大きくしたモンスター、グーガーが、凄い勢いで近づいてくるのが見える。その数六匹。

「明日には港町だつたのになあ」

馬車酔いに悩まされているカリューが溜息をつく。

「身体がなまっちゃうから、たまには魔法でも唱えようかな」「

秋留が座りながら、呪文を唱え始めた。

「火炎の住人よ、全てを貫く炎の矢となれ……」

秋留のかざした右手前方が赤く燃え始めている。

「ヒートアロー！」

勢い良く右手から矢の形をした炎が、一番左をヒタヒタと走つていたグーガーを貫いた。

「はい、運動完了！。ブレイブ、後はお願ひね」

騎士は君主のために命をかけて使命を全うするらしい。その点だと俺も秋留の騎士と言えるかもしれない。

ただし騎士と違うのは、俺にはヘボい『騎士道』なんていうものに基づいて戦うような精神は、サラサラないというところだ。

俺はミズル亭のアイテムショップで買った小型の爆弾を懐から取り出した。店の親父の話だと「小さいわりに威力はデカイ」という事だが……。

「おい、ブレイブ！ 爆弾眺めてないで、早く何とかしろ！ もう目の前まで迫つてきているぞ」

俺はいつの間にか、十個六千五百カリムで買った爆弾を勿体無い気持ちで見ていたようだ。

一度使ってみないと危険な事は分かっている。しかも店屋の親父の手作りっぽい！

カリューの一言で目を覚ました俺は、左手につけている手甲で爆弾に火をつけると、馬車の後方に向かつて放り投げた。

見事にグーガーの口の中に爆弾が入った。暫くするとグーガーの身体が破裂……。

大爆発と共に馬車が大きく揺れた。

「ぬおおおおお！」

ジゴットが宙に浮いた馬車の中で叫ぶ。

馬車から飛び出たカリューが遠くに吹っ飛ばされながら叫ぶ。

- 一
モキアカモク

秋留が馬車から振り落とされない様に、近くの柱にしがみついて
いる。どうせなら俺にしがみついてくれれば良いのに。
どっちが空でどっちが地面かは分からぬが、馬車が宙を舞つて
いるのが分かる。

そして

豪快に地面に激突した黒車は派手な音を立てて分解された。恐るべしアイテムショップの親父……。

がら秋留が立ち上がる。

「おはよう」と她说てゐる。フレイア

ほへを腹にませて怒る秋留は思わず抱きしきたくなつてじあへ

「…………咄追未だが変態じゆうて采かぶら

ジエットが百八十度回転した首を両手で回転させながら言った。

いふら、シヒだからとて豪快遊ぶ筈がくるのは俺だけが不思議だ。

「まあ、モンスターは撃退出来たんだから、結果オーライじゃないのかな？」

俺は威力抜群の爆弾を、鞄の奥の方に入れながら言った。
遠くから猛烈な勢いと形相で近づいてくるカリューが眼に入る。
小言言われるんだろうなあ。

「あ」

隣を歩くカリューがだらしない声を上げる。太陽が真上に来ていて正に灼熱地獄。しかもここ最近多かつた雨のせいであつぱりと水分を吸収した地面からは熱気がとめどなく湧いてきている。

暑さで気が立つてゐる俺はカリューに向かつて言った。

カリューは生氣のない眼で俺を睨みつけている。

「あ～あ～、すみませんねえ！　俺のせいで炎天下を歩く事になつちまつて！」

「ブレイブ殿にカリュー殿、喧嘩はそれくらいにしといて下され」銀星に乗りながらジェットが言つた。隣では優雅にアレキサンドラに乗つた秋留が、俺達の方を見ながら微笑んでいる。秋留の背中に住んでいたラードーは日傘のようになり、太陽の日差しから秋留を守つていた。

「予定では今日中には、港町ヤードに着くかと思ってたけどなあ」隣でカリューがデカイ独り言を言つてゐる。あまり知らなかつたが、こいつは結構根に持つタイプだな。

「まあ、このペースでも明日にはヤードに着くんじゃない？」

俺と同じで方向感覚があまりない秋留が言つてゐる。こんな事を言つと「ブレイブと一緒にしないで」と言われるのだが。

空を見上げると、少し雲が出てきたのが分かつた。明日はまた雨になるのだろうか。港町に着くのが更に遅れそうな気がする。

太陽が少し傾いてきた。パーティーの誰も腕時計なんていう高価な物は持つていないので正確な時間は分からなが、今は午後の二時くらいだろうか。どうやら暑さのピークは超えたようだ。

俺達は木陰で少し休むと再び歩き始めた。

暑さで無駄な話も出来なくなつた頃、俺は後方百メートル位に何者かの気配を感じ始めた。昨日襲つて来た奴だろうか。

俺はパーティーのメンバーに声には出さずに、指を後ろに向けてサインを出した。

秋留が静かに腰に装備している折り畳み式の杖を構える。杖の先端の所に、以前泊まつていたジーロンアンダーソン村で買った、墮天使のお守りという黒い人形が情けなくぶら下がつてゐる。

「人数は……二十人くらいかな。どいつも身軽そうだ」

俺は耳に神経を集中させ足音の数を数えてから言つた。

「どんな奴らだか見えるか？」

カリューも腰の剣に手を掛けながら俺に聞く。

「いや……。水分を含んだ地面が水蒸気を上げているせいでの、ほとんど確認出来ない」

後方をバレないように確認してから答える。

「前方からも来たようですね」

銀星に乗ったジェットが少し高い位置から言った。確かに前方からも十人程の集団が近づいてきているようだ。さて、どうするか？「このままだと挟み撃ちにあっちゃうね。人数の少ない前方に走つて、先に数を減らした方が良さそうだよ」

我がパーティの頭脳的存在である秋留が冷静に判断して言った。秋留の作戦はいつも的確で無駄がない。

俺達は一斉に走り始めた。同時に後ろから追跡して来ている集団も一斉に走り始める。

どうやら相手も馬鹿ではないらしい。

「まずは前方の敵から殲滅するよ！」

秋留は叫び終わると、呪文の詠唱を始めた。俺も両手にネカーとネマーを構える……と、待てよ。

「秋留、奴らをこれ以上近づかせないようにしてくれ」

俺は背中の荷物を降ろして、底の方をガサゴソし始めた。

「大地の詩に合わせて、踊れ、地の精靈、ノーマンダンス！」

秋留は呪文を発する言葉と共に右手を大地にかざした。

数十メートル前方まで近づいてきた集団の目の前で、無数に大地が破裂する。

盗賊風の出で立ちをした十人程の足が止まつた。リーダー風の男が「落ち着けニヤー」と激を発しているようだ。

「ナイス、秋留！ んじゃあ、こいつを喰らえ！」

俺は左手の手甲との摩擦で火をつけた小型の爆弾を、敵集団目掛けて放り投げた。

「慌てるニヤ！ 小型の爆弾だニヤ！」

またしても、変な喋り方のリーダー風の男が叫ぶ。

残念でした。確かに見た目は小型だけど……。俺達は前方の集団から眼を反らして耳を塞いだ。

先ほどとは違ひ予期しているとはいえ、凄い振動が辺り一帯を駆け抜けた。爆風が爆煙を伴い視界を奪う。

俺は空気の振動が止んだ事を確認して、耳から手を離した。

「奴らも少し怖気づいた様だな」

後方から近づいて来ていた集団の足も止まっている。いや、少しずつ後退をしているようだ。

俺の隣に先程吹き飛ばされた盗賊風の男が空から降ってきた。全身真っ黒になつていて。「愁傷様……」。

「ひ、卑怯ニヤ……」

俺のズボンの裾を掴みながら、盗賊リーダーが俺を褒め称える。

「そうだぞ、ブレイブ！ 正義に反した行為は許さない！」

俺達パーティーのリーダー風の男が俺を睨んで叫ぶ。シカト、シカト。

俺がカリューに攻められている間に、足元の真っ黒い奴はもうもごと喋つているようだ。

「回復魔法だよ！ 気をつけて！」

秋留が手に持つていた杖を真っ黒人間に振り下ろす。しかし真っ黒人間は素早い動きで杖の攻撃をかわした。

真っ黒人間の身体が光で包まれた。光の中からまたしても真っ黒人間が……つて。

「回復してないじゃん！ はつたりか！」

ツツコミながら、光から出てきた真っ黒人間をネカーで狙う。しかし目の前にいた筈の奴の姿がない。

「あそこでですぞ！」

ジエットが通りに生えている木の枝を指差した。

そこには、俺の荷物を右手にぶら下げた真っ黒人間がたたずんでいた。

まさか、盗賊の俺から荷物を奪うとは……。

だが、俺は左手を思いつきり引つ張った。真っ黒人間の右手から俺の荷物が振り落とされ、俺の左手へと帰つてくる。俺は自分の荷物を見えない鉄線で身体につなぐ様にしている。

「ちくしょお！」

罵りの声を上げながら、枝にいた真っ黒人間が上空に飛んだ。そして、後方から近づいてきていた集団の隣に音もなく着地する。いつの間にか後方の二十人程の盗賊団が目前まで迫つてきていた。

「だらしないニヤン、クロノ！」

後方の集団のリーダー格らしき真っ黒人間が、俺の荷物を奪おうとした不届きな真っ黒人間に對して言つた。

全身真っ黒な出で立ちで、緑地に黒い瞳が浮き出でている。

「獣人の様ですな」

ジエットが秋留から貰つたマジックレイピアを構えて言つた。

「そうか。

奴ら一人は、真っ黒な毛並みをしている獣人で、焦げて黒くなつたわけじゃないわけか。俺が馬車の中から見た暗闇に浮かぶ眼は、獣人の眼だつたらしい。

リーダー格らしき二人の他の盗賊団員も、獣人らしい鋭い眼をしている。

俺達の会話が聞こえたのか、真っ黒毛並みの一人の獣人が前に歩み出た。

「あたしの名前はシャイン。誇り高き黒猫ニヤン」

自己紹介と同時に両手から鋭い爪が飛び出す。シャインと名乗つた時の声から察するにメスの獣人のようだ。

「僕の名前はクロノ。同じく獣人盗賊団ビースデンのダブル頭の人だニヤ」

先程俺が吹つ飛ばしたクロノと名乗つた獣人が俺を睨みつけて言う。

「そちらが自己紹介するならば、こちらも自己紹介するのが礼儀だ

ろうな

正義感たっぷりで、茶番が大好きな我らがリーダー、カリューも一步前へ出て言つ。

「知ってるニヤ。レッドツイスターのカリュー、ニヤ」クロノの発言で自己紹介を中断されたカリューの機嫌が少し悪くなつた。

「そつちの女性が幻想士の秋留、その後ろで秋留を守るように立っているのが、チェンバー大陸の英雄ジェット。しかも厄介な事にゾンビと来ているニヤン」

次はシャインと名乗ったメスの獣人が喋る。さっきから交互に話している様だ。

「で、残つた黒い奴が、極悪非道の……」

俺の番でクロノの喋りが止まる。クロノは他の獣人と何やらヒソヒソと話始めた。

隣では、秋留が俺に気づかれないように、クスクスと笑っている。

「そうか！ あいつか！」

クロノが手をポンッと打ちながら言つた。

「そうに違いないワン！」

分かりやすい喋り方の犬の獣人が言つ。

「盗賊パッシ！」

犬の獣人の言葉と同時に両手のネカーとネマーをぶつ放し、両耳下に反り込みを作つてやつた。

「盗賊ブレイブだ！ そんなタコパーティーのメンバーと一緒にするな！」

犬の獣人は、尻尾を巻いて逃げ去つた。

「あんた達の行動は観察させて貰つたニヤン」

シャインが俺達に「ビシッ」と指を差して言つ。その姿にどこかお嬢様的な雰囲気を感じる。

そして華麗に指を鳴らすと、盗賊頭の後ろから眼がねを掛けた年寄り犬の獣人が分厚い本を抱えて現れた。

「えへ、大炎山でサイバーを打ち倒して八百万カリム……。次に惑わしの森で魔族の『テール』を倒して一千万カリム……。名前がそれなりに売れている事を考へると、三千万カリムは固いと思いますよ……。以上」

言いたい事だけ言つて、犬の獣人はまた後ろに下がつた。
俺達は獣人盗賊団ビースデンに大分前から眼をつけられていた様だ。

「そういう事で、身包み置いてここから立ち去るニヤン！」

シャインは全力で俺達を脅しているようだが、どうにも語尾についた「ニヤン」が迫力を無くしている。それはパーティの他のメンバーも同じらしく、ただ平然と事の成り行きを見守つていた。

「下賤な輩共め！ 俺が更生してやる！」

カリューがジェーンアンダーソン村で買つた新しい剣を構えて言った。カリューが装備しているのは、どこにでもある普通の鋼の剣だ。あまり高くはないがジェーン・アンダーソンのような小さな村では限界の品だろう。

「お前らはそこで見てろ。俺が正義の戦い方を見せてやる！」

カリューが主に俺を睨みながら言った。

「さすが、正義の味方カリューだニヤン」

馬鹿にしたようにシャインが言う。カリューは誉められたと思つて喜んでいるようだが。

「君らも見てるニヤ」

クロノがシャインの隣に並んで言う。『カリュー』対『黒猫コンビ』の戦いが始まった。

「シルフよ、我らを助ける追い風となれ！」

まずはクロノが呪文を唱え始めた。

それを阻止しようとカリューが飛び出しだが、クロノの前に立ちはだかつたシャインが鋭い右手の突きを繰り出す。攻撃を難なくかわしたカリューは、シャインの脇をすり抜けてクロノに攻撃を仕掛けた。

しかし、その場所にクロノの姿はない。

上空に逃げていたクロノはシャインの後ろに舞い降りると、詠唱が完了した呪文を唱える。

「スピードプラス・アスター！」

クロノの叫びと同時に、二人の周りの空気の流れが変わった。

「カリュー。一人の動きが速くなるよ！ 気をつけて！」

秋留が言い終わる前に、既に一人の獣人はカリューの目前に迫っていた。

秋留の言う通り、二人の動きが先程とは明らかに違う。クロノが唱えた呪文は、素早さを上げるような魔法だったに違いない。

カリューはシャインの攻撃を後方に軽くジャンプしてかわしたが、回避の動きに合わせて攻撃して来たクロノの右手の爪が、カリューの右腕に四本の赤い筋を走らせた。

「痛ううっ！」

カリューは痛みを堪えて、剣を両手で持つて水平に走らせた。その攻撃をクロノはしゃがんで、シャインはジャンプして避ける。元々、速さのある獣人の動きが魔法の力により更に速くなっているため、そう簡単に相手を捕らえる事が出来なくなっているようだ。カリューは宙に逃れたシャインを狙おうと剣を構えたが、クロノのハイキックから続く左手の突きの攻撃により迎撃出来ない。

「雪原の住人よ、全てを貫く氷の矢となれ！」

宙に浮いたままのシャインが魔法を唱え始める。あいつら、補助魔法だけではなくて、攻撃魔法も唱えられるのか！

「コールドアロー！」

シャインの両手から氷の矢が放たれ、カリューの装備している鎧の右肩のガードを吹き飛ばし、肩にダメージを与えた。カリューの肩から鮮血が舞う。

カリューに息つく暇も与えない程に、クロノの攻撃も続いている。鎧で守られていらない部分のカリューの身体に傷が増えていった。

クロノとシャインの攻撃は威力はそれ程でもないが、確実にカリ

ユーにダメージを与えていた。

しかも二人はまるで一つの身体を持っているかの様な、無駄のない連携された攻撃を続けている。

「正義も樂じやないよねえ」

秋留がカリューの戦いつぶりを眺めながら気楽に言つ。

「回復するのはこっちなんだけどな」

続けて秋留は文句を言つた。

「カリューの人並み外れた生命力なら、ほつとけば傷なんかすぐ治るんじゃないのか？」

「そんなに凄い回復力があるなら、無敵ですね」

どこから取り出したのか、お茶を飲みながらジエットが答える。ちなみに死人であるジエットは、どんな傷でも瞬時に回復してしまつ。正に無敵なのだが本人はあまり分かつてい無い様な気がする。俺達がお喋りしている間に、リーダー同士の戦いにも終わりが見えてきていた。

圧倒的な体力を誇るカリューが、二人の獣人を押し始めているのだ。

「ぜ~、ぜ~……。こいつの体力は底なしニヤ?」

荒い息をしながら、クロノが言つた。

正解。カリューの体力は底なしだ。

「何だか、馬鹿らしくなってきたニヤン」

疲れているのか余裕なのかを顔に出さないシャインも言つ。

シャインの呼吸が驚く程早いのを俺の耳は聞いている。プライドが高いんだろうな。

カリューの振るつた剣の一撃を一人仲良く蹴りで弾いて、距離を取つて着地する。

「あ、姉御……。大丈夫ですかい？」

眼帯をした猫の獣人がシャインの後ろから話し掛けた。同時に眼帯の獣人の顔に、シャインの裏拳が強烈に決まった。や……ハつ当たりか。

「今日はこれくらいにしてあげるーャン」

台詞には出さないが、肩で大きく息をしているシャインが囁く。

「ぜへ、お、覚えてろよー！」

分かりやすく疲れているクロノが盗賊にありがちな台詞を言つと、
盗賊団ビーステンは俺達の前から逃げるようにして消えていった。
「これで奴らも少しは更生して、まっすぐに生きていくだろうか」
最後のシャインとクロノの台詞が全く聞こえていないかのようだ、
カリューがふざけた事をぬかした。

時々、わざと言つているんじゃないかと思つ時があるが、カリューに限つて「冗談は言わないだろ」。

「視界が広い場所を探して今日は休憩しようか？ カリューの傷も
回復させないといけないし」

うんざりした顔で秋留が言った。

「ホー、ホー……」

頭上でフクロウが鳴いている。

ここは、港町ヤードへ向かう街道の途中。少し開けた場所にある古びた小屋の前。

俺達はいつも交代で見張りをしていて、今は俺の順番だ。次はジエットに交代する事になつていて。

「夜は涼しくていいなあ～」

俺は大きく伸びをしながら独り呟いた。

辺りのモンスターの気配も、全くと言つて良いほどにない。
平和つて素晴らしい。

しかし、全世界が平和であれば、俺達冒険者の存在など必要なくなつてしまつ。

まあ、そういう永遠の平和が訪れるなら、秋留と幸せな家庭を作れば良い。いや、平和な家庭を築きたい。

俺は一人でニヤけながら、色々妄想に耽つていた。

その時、すぐ近くで獣の気配を感じた。

「嘘だろ？ サっきから近づいてくるような気配は無かつたのに…」

俺は素早くネカーとネマーを構えると、辺りを観察し始めた。
しかし動く様な物体もなければ、先程感じた獣の気配もなくなつている。

暫く銃を構えて寂れた小屋の周りを回つたが、何も発見する事は出来なかつた。

俺はネカーとネマーをホルスターに戻すと、余計な雑念は捨てて正面目に見張りを再開した。

すると、先程感じたものと同じ獣の気配をすぐ後ろから感じた。
俺は前転しながら、後方に向かつて銃を構える。

獣の姿はどこにもない。

いるのは小屋の外で「口寝しているカリュー」とジョットだけだ。

秋留は馬達と共に小屋の中で眠っている。

大きなイビキをかいているカリューと死んだように眠っているジエット。

そのイビキの主であるカリューから僅かだが獣の気配を感じる。人間の能力の限界を超えて、とうとう獣となってしまったか。

俺はそんな筈はないと、カリューの顔を覗き込んだ。

「うぎやああああ！」

寂れた建物の中で、銀星・アレキサンドラと共に眠っていた秋留が杖を持って飛び出し、カリューの隣で死人の様に眠っていたジョットが慌てて起きる。

そして、頬まで避けた大きな口で欠伸をしながら、カリューが眼を見ました。

「何事ですか？ ブレイブ殿！」

ジョットがレイピアを構え、辺りを注意深く見渡しながら聞く。「昼間の盗賊団？」

秋留もジョットの隣に来て言った。

「転寝してたら恐い夢でも見たか？ ブレイブ？」

俺はカリューの顔を指差しながら口をパクパクさせている。

「ん？」

秋留が俺の指の先を見る。暗くてカリューの顔があまり見えないようだ。

野営には必須の焚き火から松明を持つてくると、それをカリューの顔にかざした。

「きやああー！」

「ぬおおおー！」

秋留とジョットがカリューを見て叫ぶ。

「ヒヒヒイーンー！」

「ヒヒヒヒイーンー！」

一緒に様子を見ていた銀星とアレキサンドラが鳴く。

「どうしたんだ？ 僕がどうかしたか？」

相変わらずの大きな口でカリューが言う。

青い髪の毛の隙間から青い毛で覆われた巨大な耳。昼間出会った獣人を思い出させる鋭い眼。鎧の隙間から見える青い体毛。恐らく全身が毛で覆われているのだろう。足の間からは、足と同じ長さ位ある立派な青い尻尾も見えている。

「か、顔……尻尾……」

秋留が口を押さえながらカリューに言った。

いつも冷静な秋留も慌てている。一人冷静なのは当の本人だけだ。

秋留に言われてカリューは左手を口に持つていった。

頬まで避けて、飛び出した口を触つてカリューが怒鳴る。

「ブレイブ！ また俺に変な装備させただろ！」

違うって！

カリューのアホさ加減に俺は少し落ち着きを取り戻した。

「じゃあ、なんなんだよ、これはっ！ 僕はどうなっちまつたんだああああああ！」

冷静になる俺達とは逆に、カリューが叫んだ。青い毛で覆われた頭を搔きむしりながら、俺達の周りをグルグルと回つた。。

「まるで獣人だよ。犬の獣人？ 狼かな？」

秋留がカリューの身体を色々観察しながら言う。

「魔剣ケルベラーの呪いが残つていたんですかなあ？」

ジエットがカリューの尻尾を掴みながら言った。

魔剣ケルベラーとは、以前カリューが誤つて装備してしまった呪われた魔剣だ。装備者は魔剣の呪いにより魔獸ケルベロスへと姿を変える。

だが、カリューが獣になる前に魔剣 자체を破壊したので、呪いは解かれたのだと思っていた。

「うん。全く分からねえ」

秋留が腕を組んで悩んでいる。

その間、カリューは自分の身体をくまなく調べて落ち込んでいた。

「まあ、それ程氣にする事でもないですぞ！ 見た目は変わつても

カリュー殿はカリュー殿ですじや！」

ゾンビになつてもジェットはジェットという事か。

そんなジェットの慰めは勿論効果なく、俺達は大きい街の魔法医に見てもらうべく予定通り港町ヤードを目指す事にした。

街道ですれ違う人が増えてきた。港町ヤードが近い証拠だ。

今朝カリューが獣になつた以外は特に問題もなく、港町ヤードの目前までやつて來た。

大きい街は必ずといって良いほど頑丈な城壁に囲まれ、数少ない門には数人の兵士が見張りに立つている。

港町ヤードも例外ではなく、門の前に立つてゐる兵士に身分証の提示を求められた。

街などに魔族や犯罪人が入り込まないようにある処置だが、力づくりで入られるケースも少なくは無い。

「えへつと、ジェットさんにカリューさんに秋留さんにブレイブさん……」

門番は手渡された身分証と俺達の顔を見ながら確認してゐる。

「おや？ ジェットさんは百十六歳ですか？ そんなお年には見えませんけどね。長生きの秘訣はなんですか？」

どこか抜けている門番が聞いた。

「やはり人間、早寝早起きが一番ですじや」

人間を辞めているジェットが真面目に答える。

「これなら、魔法とか使って通してもらつ必要は無さそうだね」

秋留が門番に聞こえないように、小声で言つた。

いつもならジェットの年齢に疑問を持つた門番を、秋留の魔術で惑わしてから通してもらつてゐるのだが。

「カリューさんは獣人に転職でもしたんですか？」

聞かれたカリューは「ガルルル」と唸つてゐる。

獣人に転職など出来るはずはないが、ここは突っ込みでおく。
「ようこそ、港町ヤードへ！ 海の香りと共に新鮮な魚を堪能して
いつて下さいね」

門番はそう言つと、頑丈な鉄の扉を開けて俺達を街の中へと通してくれた。

「あれじゃあ、門番の意味はないよね」

門から街の中へと歩きながら秋留が言つ。

港町ヤードは、旅人や商人で賑わっていた。冒険者の数が多いかも知れない。

「日も暮れてしまし、今日は宿を探して明日の朝、魔法医にカリュ一を見せに行こう」

こういう事はパーティーのリーダーであるカリューが言つ台詞なのだが、リーダーは極端に落ち込んでるので秋留が代わりに言った。

港町ヤードは他の大陸との交流が盛んなため、数多くの種族が生活しているようだ。

宿屋を探している途中も、カリューと同じ獣人族や肌の黒い人間の種族とすれ違った。珍しいエルフの姿も時々見かける。

「いらっしゃいませ、四名様ですね？」

俺達は大きめの宿屋シーサイド・インを見つけて中へ入った。

歳の若いアルバイトと思われる女性が、カウンターの向こうから早速話し掛けてきた。

「一部屋空いてるかな？」

秋留が言つ。俺的には同じ部屋でも問題ないのだが。と言つたか、むしろ同じ部屋がいいのだが……。

「丁度一部屋空いてますよ。ご案内します」

残念なことに一部屋空いているらしい。俺達は一階の角部屋に案内された。室内は海をイメージする様な青一色で統一されている。

「じゃ、また明日ね」

秋留は一人隣の部屋に入つていった。

秋留の後に着いて行こうとする俺の襟首を掴んで、ジェットが別の部屋に引っ張っていく。

「ブレイブ殿の部屋はこっちですぞ」

俺は荷物をベッドの脇に置くと、身体に繋いでいる鉄のワイヤーも外した。

「はあゝ。疲れたし、早速風呂に入らせてもらおうかな」
シーサイド・インは各部屋にトイレと風呂が備えつけられている、値段が少し高めの宿だ。宿代は一人一万八千カリムもするが、代わりに海の幸を使つた美味しい夕食が出るらしい。

「ふうう」

俺は湯船に浸かりながら大きく息をついた。やつぱり風呂は落ち着く。冒険者の中には風呂嫌いな奴も多いらしいが、そいつらの気が知れない。

ちなみに、俺は特別一番風呂が好きという訳ではない。

ジェットとパーティーを組んでからは、少なくともジェットの前に風呂に入るようにしている。理由は深く考えたくないが、湯船にオゾマシイ物が浮いてそうで恐い。

そして、獣人となつたカリュー。毛が一杯浮いてそうで嫌だつたので、今日は即行で風呂に入る事に決めたといつ訳だ。

「気分転換だ」と言いながら俺の後に風呂に入ったカリューは、案の定余計に落ち込んで風呂から出てきた。

一時間位は風呂に入つていただろうか。身体中が毛だらけで暫く放心状態だったに違いない。

「じゃあ、次はワシが……」

そう言いながらカリューの後にジェットは風呂に入つていった。
部屋に取り残されたのは、俺とカリューの二人。カリューの周りには重い空気が漂つている。

「まあ、元気出せよ。ここは酒の肴が美味しいに違いないぞ」
効果がないと思っていた俺のなぐさめの台詞は、想像以上に威力があつたようだ。

今までカリューの周りを覆っていた黒い空気が一気に弾けとんだ。
「そうだな！ 日も落ちてきたし、ジェットが風呂から出たら一杯やつて来ようかな」

カリューの機嫌が分かりやすく良くなつた。安心した俺は二丁の愛銃の手入れをし始める。

暫くしてジェットが風呂から出てきた。

あまり不機嫌そうな顔をしていないところを見ると、湯船はそれ程荒れていなかつたらしい。

「ジェット！ 飲みに行こう！ ここは酒の肴が美味しいに違いないぞ！」

俺が先程言つたなぐさめの言葉をそのままジェットに言つている。カリューの台詞を聞いたジェットは、急いで支度をすると、二人仲良く部屋を出て行つた。

「カリュー殿、今夜は共に人間を辞めた者同士、仲良く語り合いましょうぞ！」

宿屋の廊下を歩きながらジェットの言つた台詞が、盜賊である俺の耳に聞こえてくる。その後カリューの唸り声がこだました。

「さて」

俺は銃をホルスターにしまつと、俺達の部屋を出て隣の秋留の部屋のドアをノックした。

暫くしてシャンプーの匂いを漂わせながら秋留が部屋から顔を出す。

「あれ？ どうしたの、ブレイブ？」

「そろそろ夕食の時間だろ？ 宿の食事はいつでも食えるし、今日は一緒にどつかに喰いにいかない？」

わざとらしく前髪を搔き分けながら格好良く言つてみる。

「あははっ、そういう仕草似合わないよ

即行で撃沈。

「カリューとジェットは美味しい酒の肴求めて旅立つて行つたよ」

気を取り直して秋留に説明する。

「ふう〜ん、プレイブがうまい事言つて追い出したわけじゃないんだ？」

内心「その通り」と思いつつ顔に出さないよつて否定すると、秋留は「準備するから待つて」と部屋に戻つていった。

暫くしていつもの冒険者の装備をした秋留が姿を表す。背中にはボディガードのブレードもいるようだ。

「じゃ、行こ〜！」

秋留が外に向かつて指を向ける。やつた！ 秋留と一入つきりのデートだ。

小高い丘の上に建てられた宿屋の外に出ると、丁度海の向こう側に太陽が落ちるところだった。

目の前に広がる海が真っ赤に染まつている。

「わあ〜、綺麗〜」

秋留が真っ赤な光景を目の前にして眼を輝かせている。

「あ、秋留の方が綺麗だよ」

俺は秋留の肩に手を回そうとした。しかし隣には誰もいなくて危うく転びそうになる。

秋留は既に十メートル程離れた所を歩いていた。

「さすが、元盗賊！」

俺は半分涙目になりながら、秋留に追いつくべく軽く走り始めた。

「いいが良いなあ」

秋留が立ち止まつたのは、独特な雰囲気をかもし出している海鮮亞細安亭だ。かいせん……あじあんてい？

入り口の両脇には、変わつた生物の置物が並んでゐる。

「こ」の獅子みたいな置物は亞細季亞大陸の守り神、ゴーザーだよ

秋留がゴーザーの頭を撫でながら説明した。どうやらこの店は亞細季亞大陸の料理を出す店らしい。それで亞細安亭か……。

「いらっしゃいませ〜」

店内に入ると、陽気な女性店員が話しかけてきた。

秋留が今着ているチャイニーズ服と同じような格好をしている。

「あら？ 亞細季亞大陸の人？」

店員は秋留の格好を見て聞いてきた。

「そうですよ」

『氣さくに秋留は答える。人見知りが激しい俺には出来ない芸当だ。今の俺の顔も第三者から見ると酷く無愛想に見えるに違いない。

「ここ」のマスターは亞細季亞大陸出身なんです。特別席に案内しますので、ゆっくりしていつて下さいね』

俺達は一階の見晴らしの良い席に案内された。どうやら店のマスターに特別扱いされているようだ。

「いい眺めだね」

俺達が座っている席からは広大な海が一望出来る。太陽はもう海の向こう側にほとんど隠れてしまつたよつだ。

秋留と過ごす楽しいひと時。

その時俺の耳は、一階から見える通りの角の向ひから、聞きなれた声が近づいてくるのを感じた。

「ジエット、次はどこに飲みに行くか？」

「ここ」の角を曲がった先に、亞細季亞料理を出す店があるようですぞ」

素早く両手にネカーとネマーを構え、カリュー・ジエットが飛び出していく通りにある『ミキ箱を吹っ飛ばす。

「うおっ！ なんだ？」

「不吉な予感がしますなあ」

「せつかくの酒飲み『テー』を無駄にしたくないな。他の店を覗たらうつ

「そうですね」

「どうしたの？ ブレイブ？」

気づくと秋留が俺の顔を覗いていた。

「ちょっとデカイ虫が飛んでたんだけど、無事に追っ払つたよ

秋留が不安そうに辺りをキヨロキヨロしている。秋留は大の虫嫌いだ。

俺が本気を出せば、元盗賊の秋留でも見えない程の銃さばきが出来る。

暫くすると、先程の店員が大きめの皿に乗せた料理を運んできた。
「あれ？ まだ頼んでないけど……」

秋留が言つと、店員は笑顔で「マスターの奢りですよ」と言つて、俺達のテーブルに料理を置いていった。

「わあ！ 肉ジャガンだ！」

秋留が嬉しそうに言つた。

秋留が言つには、亜細季亜大陸の有名な家庭料理で、肉どじやがいもを長い時間掛けて煮込んだ物らしい。

一口食べると、口の中に幸せが広がつた。大きめに角切りされた豚肉は、とろける様に柔らかい。

「こりゃあ、美味しいな！」

「でしょ？ 私も大好きなんだ」

そう言いながら、秋留も肉ジャガンを次々に口に放り込んでいる。秋留は店員にとろろん御飯を二つと、ダイコーン汁を一つ、亜風タコサラダを一つ頼んだ。

秋留が頼んだ料理はどれも美味しい、一人ともあつという間に食べ終えてしまった。

「ふう～、喰つた喰つた」

俺は腹を擦りながら言つ。久しぶりに美味しい料理を食べた気がする。

「ご馳走様でした」

秋留が行儀良く手を合わせて言つている。亜細季亜大陸独特の食べ終わつた時の挨拶だ。

俺達は店員に御礼を言つと、会計を済ませて外に出た。会計は勿論俺持ちだ。カリューやジエットの分は払いたいとは全く思わないが、秋留のためならいくらでも払いたいと思つてしまつ。

外は大分暗くなつていて、通りを歩く人も減つてきている。

「んじゃあ帰ろうか。明日はカリューを魔法医に見せにいかないとな」

俺は秋留との食事に満足して言つた。秋留とそれなりに楽しい会話も出来たし美味しい料理も喰えた。

「そうだね。我らがリーダーはやたらと貧乏くじを引きたがるからね」

秋留が面白そうに言つ。確かにカリューはあまり良い思いをしているとは思えない。あの強靭な体力がなければ生きていかないに違いない。

「まあ、メインはテールの屋敷跡で手に入れたオリハルコンと魔法の短剣の鑑定かな」

俺はしつかりと忘れていない事をアピールするべく秋留に言つた。「あはは、そうだね。まあ、そんな事言つと、カリューは全力で怒るだろうけど」

秋留が苦笑いをしながら答える。

薄暗い通りを一人で楽しい会話をしながら歩く。今日は人生で最良の日だ。しかしその幸せも長くは続かないようだ。通りの向こうから、獣人の集団が歩いて来るのが見える。

「面倒くさい事になりそうだな」

俺は秋留に小声で言つた。

「あいつら盗賊団だつたよね？ 一体門番は何をやつてるんだろう？」

？」

秋留が言つ。恐らく盗賊団をこの街に通したのも、ネジが沢山抜けているあの門番の仕業に違いない。

どこか遠くでクシャミが聞こえた気がしたが、さすがに気のせいだろう。

「おい、貴様ら……」

集団の先頭を歩いていた鳥の獣人が俺達の顔を見て言つて來た。

「何か？」

秋留が静かに答える。

「お、お前らどこかで見た気がするぞ」

鳥獣人の喋りの勢いが一気に弱くなった。

「気のせいでしょう？」

秋留は子供をあやす様に優しく答える。また何かの術を使つているな。

「そ、そうだな。気のせいだな。邪魔したな……」

獣人達は俺達と何も無かつたかのように通り過ぎていった。

「いつ見ても見事だよな」

何の術を使つているのかはサッパリ分からぬが、俺は心底関心して秋留に言う。

「え？ そ、そんな事ないよ」

秋留は少し顔を赤らめつつ慌てて答えた。

「ちょっと待つニヤン！」

どこからともなく、聞き覚えのある声が響き渡つた。

俺達の目の前に音も無く一匹の真っ黒な獣人が舞い降りる。

「他の獣人達は騙せても、あたし達は騙せないニヤン！」

またしても、肉球のついた可愛らしい手を突き出してシャインが叫ぶ。

「へ……。さすが魔法を使えるだけあつて私の魔力に掛からなかつたみたいだね」

秋留が感心した様に言つ。しかし、その顔には若干の焦りが見えた。いつも冷静な秋留が珍しい。それだけ厄介な相手だという事が。「シャ、シャイン。やっぱり人違ひじゃないのかなあ？」

隣でクロノが言つている。クロノは秋留の魔力にまんまとハマッたようだ。

即行でクロノの顔面にシャインの裏拳が飛ぶ。

「うん……」

秋留が隣で唸つた。

「どうした、秋留？」

俺は両手にネカーとネマーを構えながら横目で秋留を見た。

「お腹痛い。ちょっと食べ過ぎたみたい……」

秋留は相手にバレないようにお腹を押さえている。

暫しの沈黙。

あまり猶予はないようだ。

「とりあえず、口ロナバーニングでふつ飛ばしちゃおうか？」

秋留が街中で恐い事を言つてゐる。口ロナバーニングは広範囲で全てを溶かす高熱を発する呪文だ。

腹を壊しているせいで冷静さを無くしている様だ。本当に危険なのはシャインとクロノではなく、手負いの獣である秋留かもしれない。

俺は五感をフルに使って辺りを検索し始める。秋留が暴走する前に。

「奴らの向こう側が宿屋への道だ！ まずは奴らの脇を通り抜けるぞ！」

俺は秋留に向かつて言った。黙つて秋留は頷く。両手にはいつでもブチかませる様に杖をしつかりと握つてゐる。

「来るニヤン！」

シャインが叫ぶ。鼻を押さえながらも半信半疑でクロノも両手を構える。

俺はネカーとネマーをシャインとクロノの顔目掛けて発射した。

「い……痛いニヤン！ クロノは何してるニヤン！」

俺の予測通りシャインとクロノの頭が激突した。俺は一人が避けた時に頭と頭がぶつかる様にネカーとネマーから発射される硬貨の軌道を調整していたのだ。

言い争うシャインとクロノの脇を秋留の手を引っ張りながら走り抜ける。

「逃がさないニヤン！」

シャインが俺達の方に走り寄りながら呪文を唱え始めた。

「迫り来る影は凍える吐息、生命の息吹を止めるクサビとなれ……」

シャインが魔法を唱えている間もネカーとネマーで狙おうとしたが、クロノが蹴りを連発してくるために迎撃出来ない。

「チエイスフリージング！」

叫び声と共にシャインの両手から真っ白な冷気が俺達に向かつて走ってきた。クロノはいつ魔法が放たれるかを完璧に分かつていたかのように、魔法の射程範囲からは外れている。

俺はネカーとネマーを冷気に向かつて発射した。

しかし冷氣に触ると同時に硬貨が一瞬にして氷の塊と化す。

「上！」

秋留が俺の前を走りながら叫んだ。

上を見上げると『お酒は二十歳になつてから』という大きな看板が目にに入った。

俺は考える間もなく、看板を止めてある一本の木の柱をネカーとネマーの硬貨で粉碎した。

俺達とシャイン・クロノの間の石畳に、看板が盛大に突き刺さった。

その看板も一瞬で氷の塊と化したが、魔法の威力はそこで途絶えたようだ。

「後少しだ」

俺は左前方の飲み屋シェル・シェル・シェルを見ながら言った。

秋留は相変わらずお腹を押さえながら俺の前を走っている。

後方で氷の塊と化した看板が、クロノとシャインの息の合った蹴りにより粉砕された。

氷の破片が俺の右腕をかすめる。

「今だ、秋留！ 悲鳴を上げるんだ！」

俺は秋留に叫んだ。

秋留は理由も聞かずにありつたけの悲鳴を上げた。

「きやああああああああああ！」

秋留の叫び声でシャインとクロノの動きが一瞬止まる。

その一瞬の間に、飲み屋シェル・シェル・シェルから半分酔っ払ったカリューが飛び出してきた。

「婦女子を襲う卑劣漢はどこだあ！」

半獣人と化したカリューの叫びは、いつもの何倍も迫力があるようだ。

シャインとクロノも完全にビビって声が出せないでいる。

「な、なんニヤ？」

クロノが逃げ腰で言う。カリューの大胆なイメチェンのお陰で誰だか分からぬようだ。

「悪に名乗る名など無し！」

カリューが問答無用でクロノとシャインに飛び掛つていった。

俺達はバレないようにその場を逃げ出した。

俺は人気の無くなつた通りを秋留と一緒に走つている。やたらと秋留の足が速いのは腹を壊しているせいだろう。

「五感を集中させて、飲み屋で騒いでいるカリューの声を探したんだよ」

俺は走りながら秋留に説明した。俺の活躍っぷりを聞いて欲しいのだが秋留はそんな場合ではないらしい。

「獣人になつて荒れているカリューの声を探すのは、意外と簡単だつたよ」

俺は尚も説明を続けるが、相変わらず秋留の反応は無い。

暫くすると宿屋に着いたが、何の会話も無く、秋留はそのまま自分の部屋に吸い込まれていった。

翌日。

昨日は軽く食後の運動をしたせいで、脇腹が痛い。

隣では夜遅く帰つて来たカリューとジエットが寝ている。昨日はあれからどうなつたのだろう。

まあ、生きて帰つてきているところを見ると、シャインとクロノを無事に追つ払つたようだが。

「良い朝ですね、ブレイブ殿」

ついさっきまで寝ていたジェットがいつの間にやら起きている。

部屋のカーテンの隙間から射し込む光が部屋の中を明るく照らした。

「昨日は大丈夫だったか？」

ジェットにさり気なく聞いてみる。

「中々楽しい夜を過ごせましたですじゃ。最後に一悶着ありましたが……」

俺は思わず苦笑いしてしまったが、俺と秋留の幸せのために犠牲になれたと思って諦めてくれ。

今日はカリューを魔法医に連れて行く事になつていて。

俺とジェットは獣になつてイビキが一段と五月蠅くなつたカリューを起こすと、出掛ける準備を始めた。

「先に外で待つてるぞ~」

秋留の部屋の前で言う。部屋の中から秋留の返事が聞こえた。今日は体調は良いようだ。

まだ午前中だと言うのに外は暑かつた。

カリューは身体中毛だらけになつたせいか大分暑いようで、舌を出して荒い息をしている。獣人姿も大分板についてきたようだ。

「この身体、治ると良いんだけどな」

カリューは舌を出しながら言つた。舌噛みそうだぞ。

「そうですね。その毛並は冬は良いかもしけんが、夏は暑そうですね」

カリューが獣人化した事をあまり深刻に思つていなさそなジェットが言つ。ジェットは実は自分と同じような境遇の仲間が増える事を、密かに喜んでいるのかもしね。

「おつ待たせ~」

秋留が元気に宿屋の扉を開けて出てきた。

今日は膝下位まである黒いスカートに短めのブーツ、白いシャツの上に黒のチェストアーマーという装備だ。

背中にはいつもの様にボディーガードのブラーがいる。

「魔法医はすぐ近くにあるみたいだよ」

いつの間に仕入れた情報なのか分からぬが秋留が言った。

俺達は秋留の後に着いて歩く。

昨夜と違つて今は通りを行き交う人々が多い。時々俺達の方を振り向いて、ヒソヒソと話し合う声が聞こえてくる。どうやら俺達の事を噂しているらしい。

「獣人と人間のパーティーだよ」

「珍しいな」

「変な爺さんも交ざってるな」

俺達はそれ程有名ではない。冒険者の間や一部の冒険者マニアで有名なだけだ。

しかし、獣人と化してしまったカリューのいるこのパーティーじゃあレッド・ツイスターと気づく人はいないかも知れない。

「あそこだよ」

暫く歩くと秋留が前方にある看板を指差して言った。看板には『マジカルミラクルやつて来る』という店の名前なのか何なのか分からぬ文章が書かれている。

魔法医院の大きさは小さめの宿屋くらいだろうか。扉の両側には魔力で灯っていると思われるランプが取りつけてある。

魔法医院の扉を開けた時に「ガラガラガラーン」と病院とは思えない様な豪快な鐘の音が建物内外にこだました。

「はい、いらっしゃい！ 腕抜群の魔法医ドライドのマジカルミラクルやつて来るへようこそ！」

魔法医には到底見えない男が揉み手をしながら近づいて来た。首には魔法医を表す証明書をつけたストラップを下げている。

証明書の名前は予想通りドライドとなつていた。こいつ医者か？ 「選んだ魔法医院、間違つたかな？」

秋留が心配そうに呟いたのが聞こえた。確かに少し不安ではあるが他人事に過ぎないとと思う俺は残酷なのだろうか？

「誰かどうなさつたんですか？」

青白い顔をして真っ黒な髪を七三分けにしているドルイドが年長者のジェットを建物の奥に案内しながら言った。

「こちらのカリュー殿の事で参つたんじゃが」

ジェットがドルイドのキツいキャラクターに臆することなく言った。さすが人生経験豊富なジェットは違うな。

紹介されたカリューの顔が少し引きつった。

「まあ、獣人のカリューさんね。うちは獣人でもエルフでもどんな種族でも対等に診察しますよ」

ワインクしながらドルイドが言った。

全身に鳥肌が立つた。カリューに突然生えた全身の毛も逆立つている。

「お、俺は人間だ」

カリューがやつとの事で言った。

「え～っと、聞き違いかしらねえ～……。元人間？」

「うう……そういう事だ、間違いだつたらどんなに嬉しい事か……」

それからカリューはドルイドにこれまでの経緯を説明し始めた。

その間に俺達は暇なので診療所の中をブラブラと見て回る事にした。

見慣れない液体の入った瓶や変わった形の黒い果実らしき物が棚に並べられている。

「これ……魔樂果まがくがだよ！」

秋留が俺の見ていた黒い果実を手に取りながら言った。どうやら珍しい物らしい。

「効果の高い魔法のアイテムを作る時とかは、必ずと言つて良いほどに使うアイテムだよ」

興奮しながら秋留が言った。

俺達の会話を盗み聞いたりしく、ジェットが後ろから黒い果実を見つめている。

「そ、その果物！」

ジエットが突然険しい顔をして言つた。いつも物静かに喋るジエットの声が少し力強い。

「ああ、そつか……」

秋留が何かを悟つたように言つた。

話についていけていない俺に向かつて秋留が説明してくれた。

魔楽果は、あるモンスターが人間や大きめの動植物などを食らつた時に生み出す果実らしい。

そのモンスターは普段はそこら辺に生えている木と同じ見た目をしているが、獲物が近づくと巨大な口を開けて全てを飲み込むという事だ。

マウスラフレシア。

それがその木の様なモンスターの名前であり、ジエットと銀星の生き物としての命を奪つたモンスターでもあった。

「忌々しいモンスター……。ワシが最期に見た光景は、マウスラフレシアの巨大な木に生つた黒い果実だったんじゃ……」

ジエットが思い出す様に言う。

その危険な果実がこの診療所には沢山置いてあるようだ。

「こここの魔法医は腕が良いのかな？ 沢山のお客から治療費を貰わないといと、こんな高価な果実は買えないはずだからねえ」

「ちなみに一ついくら位なんだ？」

俺は聞きたくて仕方無かつた事をとうとう聞いてみた。

「相場では一つ千万カリム位かな……」

不味そうな果実に千万カリムか。

俺は果実を懷に入れたい衝動を抑えながら生唾を飲み込んだ。秋留が心の中を読んだように白い目で俺の事を見ている。さすがに盗みは犯罪なので止めておく事にする。

「おーい！」

部屋の奥でカリューが俺達を呼ぶ声が聞こえた。

「カリューさんの血液を少し調べてみましたよ」

俺達がカリューの隣までやつて来ると、ドルイドが七三分けを右

手で書き分けながら説明し始めた。

「カリューさんに聞いたところ、以前魔族の呪いにより魔獸になりかけたそうですね」

確かにカリューは以前、呪われた魔剣の影響で魔獸になりかけたが、それが今頃になって発症したのか？

「更に一昨日は獣人に襲われた……。その時に身体の至る所に獣人の爪で攻撃を受けた……」

まるで何かの事件の推理をしている様にドルイドが説明している。相変わらず一拳手一投足が気持ち悪い。

「血液の中に異なる獣の因子がくっついているのが確認出来ました。獣人化してしまった原因はまず間違いないでしょうね」

つまりカリューはくだらない正義を主張したせいで獣人からの攻撃を全身に浴びてしまい、本人まで獣人と化してしまったという事が。これを気に正義に対しての執着心は無くして欲しいものだ。

「治せないんでしょうか？」

秋留が心配そうに聞く。しかし隣の丸い椅子に座っているカリューの表情を見る限り、対策がない訳ではない様だ。あまりのショックに頭がおかしくなってしまったのではない限り……。

「心配無用です。この港町ヤードから東の海岸沿いを半日程歩いた所に地下洞窟があります。その洞窟にある滝はどんな呪いにも効く万能薬でして……」

ドルイドが再び手もみを始める。

「え？ その洞窟に行く必要があるんですか？ その滝の水がどうかに売つたりしてないの？」

秋留の質問にドルイドが残念そうに答える。

「残念ながら、その水は洞窟の外に持ち出すと効果を無くすみたいなんですよ」

もしかしたら地下洞窟自体に不思議な効果があるのかもしない。

俺達はドルイドにぼつたくりかと思われる様な診療費を支払うと、居心地の悪い診療所を急いで出た。

ちなみに診療費を払ったのは勿論カリュー本人だ。

「さて、早速行くか！」

カリューが元気良く言った。希望が出来たと思つたら早速これだ。

カリューらしいと言えばカリューらしいが。

「なあ……」

俺はカリューに話し掛けようとしたが、隣から秋留に止められた。
「治るかも分からぬ滝に行くのは無駄だ、つて今のカリューに言つつもり？」

秋留が小声で俺に言つ。

確かに今のカリューには何を言つても無駄だらう。

俺は秋留に頷くと諦めてカリューの後について歩いて行く事にした。

「銀星元気だつた？ アレキサンドラ、今日も綺麗よ

ヤードの入り口近くにある共用の馬屋で、秋留が一頭の馬の頭を撫でながら言つた。

俺達がこの場所に来てからも銀星は守る様にアレキサン德拉の前に立つっていた。こいつは惚れたな？

「ブレイブ、ぼさつとしてないで荷台に荷物を詰め込め！ 早速出発するぞ」

俺はここに来る途中で宿屋に寄つて取つて来た荷物を新しい荷台に乗せた。ちなみに荷馬車は近くのディスカウントショッピングで買ってきた中古品だ。

「それでは出発するですじや、銀星、アレキサン德拉を頼むぞ」

ジエットが馬の手綱を持つて掛け声を掛ける。銀星が勢い良く歩き始めたがアレキサン德拉が進まない。

「どうしたんじや？ アレキサン德拉……」

ジエットが御者席から身を乗り出して確認した。俺も荷馬車の幌の間から外を確認する。

そこには、金髪ロングでキリリとした騎士風の冒険者が、赤い毛

並みの立派な馬に乗つて歩いていた。

「ヒヒイーン」

アレキサンドラが甘えている様な鳴き声を上げる。それに気づいた赤い毛並みの馬が近づいて来た。

「こら！ ホールド！ 勝手に歩くな！」

ホールドと呼ばれた赤い毛並みの馬に乗つている騎士が、手綱を引つ張りながら叫んでいる。しかしアレキサンドラ同様に言う事を聞かない様だ。

地下洞窟へ向かう街道。

俺達の乗る馬車は銀星と茶色い毛並みをした雄の馬が二頭で引っ張つている。銀星の後ろ姿はどこか寂しげだ。

あれから、言う事を聞かなくなつたアレキサンドラとホールドと呼ばれていた赤い毛並みをした馬を、近くの牧場に預けてきた。向こうの冒險者もその事に納得したし、アレキサン德拉をこれ以上、危険な旅に連れて行くわけにはいかないという俺達の意見も一致した。傷心の銀星を労わって、当たり障りの無いように雄の馬を買つてきた。

しかし銀星は納得していないだろう。

「元気を出せ、銀星。もつと綺麗で可愛い馬がそのうち現れるはずですじゃ」

ジエットが銀星を励ましているようだが、効果は全く無さそうだ。俺は今まで恋人という存在を作つて来なかつたのでフランれるという経験をした事がない。一体どれ程辛いのだろう？

隣に座つていた秋留が御者席に歩いていつて言った。

「銀星、元気出して。銀星には私がいるじゃない」

銀星には勿体無い台詞を秋留が言つ。俺にも言つてくれないだろうか。

秋留の台詞を聞いた銀星は秋留の方を振り向いて大きく鳴いた。元気を取り戻したようで、馬車が凄い勢いで進んで行く。しかし危

険だから銀星には前を向いて走つてもらいたいものだ。隣を走る雄馬も走り難そうだ。

「その馬車、ちょっと待つニヤー！」

俺の耳に一瞬聞き覚えのある声が聞こえてきたが、超特急銀星丸と化した馬車に声の主は跳ね飛ばされたようだ。

「ひどいニヤー……」

罵る言葉が遙か彼方に遠ざかっていく。

「全てを難ぎ払つて進んでるみたいだね。あつとこう間に洞窟に着きそうだよ」

まるで全てを分かつてていたかのように秋留が俺の隣に戻つてきて言つ。俺の頭の中に小悪魔という言葉が浮かんだ。

「そろそろの様ですぞ」

ジエットが御者席から言つ。

俺も幌の間から外を眺めると丁度通り過ぎる看板が眼に入った。

『ヤード地下洞窟 海岸沿い百メートル先』と書いてある。ちなみに俺の盗賊の眼があればこそ、一瞬で通り過ぎる看板の文字が読めるのだところ事をお忘れなく。

銀星の引く馬車が砂浜近くの街道の途中で止まつた。

目の前には断崖絶壁にぽつかりと口を開けた不気味な地下へと続く洞窟の入り口が見える。

「不気味ですね」

ジエットが荷台から荷物を取り出しながら言つた。確かに不気味であるが今のカリューには逆らわない方が身のためというものだ。大人しく進むしか道はない。

「結構暗いみたいだな。全員松明を持って進もう」

カリューが洞窟の中を覗いて言つ。獣になつて夜目が利く様になつたんじゃないか、というツッコミはしない事にした。

「じゃあ大人しく待つてね」

秋留が銀星と雄馬の背中を撫でて諭すように言った。
さて、準備も整つたし、ヤード地下洞窟へ出発だ。

俺達はダンジョンを進む時などにお決まりな陣形を取つて洞窟の中へと踏み出した。

俺が先頭で辺りを窺いながら進む。次に秋留ヒジエットが続く。殿を務めるのはカリユードだ。

「足場が悪いから気をつけてな」

松明で辺りを照らしつつ、秋留の事を心配しながら言つた。
暫くはモンスター や罠も無く無事に進んだ。

と言うより罠は無いと思った方が良いだろう。俺達は魔族の屋敷に侵入している訳でも、未知なる財宝が眠っている洞窟に侵入している訳でもない。こんなヘンビな洞窟に侵入者を阻むような罠を仕掛ける必要がない。

「ブレイブ、あんまり周りを確認してないみたいだけど、大丈夫？」
秋留が後ろから心配そうに言つた。

「多分、罠なんて無いだろう。こんな洞窟に罠を仕掛ける理由がないよ」

俺はかつたるくなつた右手から、左手に松明を持ち替えてから答えた。

俺達の話し声に紛れて前方から何かが近づいてくる足音が聞こえる。俺は素早く全員に戦闘態勢を取るように合図をすると、足を止めて辺りを観察し始めた。

俺達は全員松明を持つてゐるため、向こうからこいつらの動きは丸見えだらうが、向こうの姿は確認出来ない。

「ちょっと明るくしようか？」

秋留が右手に杖を構えて言つ。

「眼ぐらましも含めて派手なやつを頼むよ」

俺は秋留の魔法の邪魔にならない様に、少し脇にそれた。

「光の精霊レムよ、我が前にその姿を現し、全ての影を滅せよ」

秋留の呪文の詠唱と共に、構えている杖の先が暗闇の中で輝き出す。

「ブライトネス！」

杖を前方に振ると小さな光の玉がフヨフヨと漂い始め、ある一点に到達した時に太陽の輝きの様な光を発した。

「ピギヤアアア」

光に照らされた真っ白い蛸の様なモンスターが奇声を発する。特定の洞窟にのみ生息するモンスターだろうか。何年か冒険者を続けているが、今まで見た事がない。

その蛸の様なモンスターが十匹程眩い光にうろたえて、辺りをウロチョロしているのが見える。

カリューが俺の脇から勢い良く飛び出す。そして一瞬のうちに匹を同時に切り倒した。

怒り狂つた一匹の蛸が秋留に飛び掛つたが、ジェットの素早いレイピア捌きで三枚に下ろされる。

俺の足元にフラフラと近づいてきた蛸はネカーを一発撃つて破裂させた。ネカーから放たれた硬貨が地面に転がつたが、白蛸モンスターの粘液まみれになつてゐるため、再び拾つて使う気にはなれない。

「白い蛸って気持ち悪いね」

秋留がジェットの陰から言つ。確かに赤い蛸は食べても美味しいが、この白い蛸は不味そうだ。

そういう事を考えながら、硬貨を無駄にしない様に近づいてきたモンスターだけをネカーでぶつ放す。

大した時間も掛からず、全てのモンスターを倒した。

「んじゃあ、また進み始めるか」

俺は再びパーテイーの先頭に立ち、洞窟の奥へと進んだ。秋留の放つた魔法の効果は切れ、今は松明の灯りだけが頼りとなつてゐる。俺の眼でもこの洞窟の先がどうなつてゐるのか確認は出来ない。暫く進むと少し開けた空間に出た。洞窟の地面と天井からは、ちららのように鍾乳石が飛び出でている。

「幻想的な雰囲気だね」

秋留が松明で辺りの岩を照らしながら言つ。

その時、秋留の近くの鍾乳石の陰から酒場のネオン看板の様なモンスターが姿を現した。キラキラしていて綺麗だが、俺は素早くネカーをぶつ放して、蜥蜴の様なモンスターを吹っ飛ばす。

「ここは見た事もないモンスターばかりだな」

俺は他にモンスターがないことを確認してからネカーをホルスターに戻した。

「そうだね。食は無いかもしだれけど未知のモンスターには気をつけないと、どんな特殊能力を持つているか分からぬからね」

秋留がモンスターの出現した鍾乳石から離れて言う。

幻想的な空間を進むと、再び人一人がやっと通れる程の通路に差し掛かつた。

俺達は身をかがめながら奥へと進んだ。松明の灯りがゆらゆらと通路の先を照らしている。

この先は明らかに人工的に作られたと思われる通路になっていた。通路の壁には、所々に魔力で灯っていると思われる松明が掲げられている。

「あまり余計な場所に触らないようにな

この通路には何か仕掛けがありそうだ。

俺はパーティーのメンバーに注意を促すと、辺りに注意しながら通路を進んだ。

ふと石畳の一部に不自然な石がはまっているのに気づいた。周りの石は人が歩いたり自然に風化したりしてボロボロなのに対して、その石だけはやたらと綺麗なのだ。

俺は辺りの壁や天井を注意深く観察した。

俺達の進んで来た通路の入り口の天井に細い切れ目が見える。どうやらこの石を踏んでしまうと、通路入り口に隠された壁が落ちてき、戻れなくなってしまう作りらしい。

「ここのは綺麗な石は絶対に踏まないようにな

俺は再びメンバーに注意を促すと、入口の通路を更に奥へと進んだ。

通路の終わりに差し掛かつたときだろうか。

突然、後方からまたしても聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「こんな人気も無い洞窟に何しに来たんニヤン？」

後ろを見ると、毎回撃退されているのに全く懲りていらない獣人団が姿を現した。心なしか人数が大分減ったよう見える。

それにしてもあの獣人団。つけられている事に全く気づかなかつた。もしかしたら、盗賊の腕はそれなりに良いのかもしれない。その獣人団の先頭に、腰に手を当てたシャインが仁王立ちしている。

「こんなヘンピな場所を自分達の墓場に選んで良かったニヤ？」

シャインの後ろから大きく一步前進してクロノが言つた。

「さつきはよくも吹き飛ばしてくれたニヤ！」

やはり絶好調だった銀星に吹っ飛ばされたのはコイツだつたか。

「今回は我が獣人団の精銳を集めさせてもらったニヤン」

シャインが負けじとクロノの前に出た。

「あ……」

俺は思わず間抜けな声を上げた。同時に重そうな鉄の壁が天井から落ちてくる。丁度、後方の獣人団と二人の盗賊頭を分ける様に通路の入り口が閉まつた。

シャインがクロノの前に出た時に、俺が気づいた罠の石を踏んでしまつたのだ。

「な、何事ニヤ？」

クロノが後方の鉄の壁を触りながら叫んだ。

シャインは踏み込んだ右足をそつと上げて、その下の石を確かめる。

「クロノが床にあつた石の罠を踏んだニヤン…」
「うわ……」

「え？ そうだつたのニヤ？」

クロノがすまなそうにシャインに近づく。

その後暫くシャインはクロノに文句を言つていた。何とも豪快な

性格だと思いつつ俺達はただ呆然と事の成り行きを見守っていた。

小言が終わると、クロノとシャインは鉄の壁の向こうにいると思われる獣人団に向かつて大声で叫んだ。

だが完璧な防音効果がされていてるらしく、相手からの反応がない。それにして、あの罠……。

侵入者を阻むためではなく、侵入者を帰さない様な作りになつていた。一体どういう事だろう。

「あの壁は魔力を弾き返す様な特別な金属で出来ているみたいだよ」秋留が壁を観察しながら言う。さつきからもぞもぞと壁に向かつて呪文を唱えていたのは、それを調べていたということか。だが秋留の言うことが正しいとすると、ここから脱出する手段は、先に進んでどこか別の出口を見つけるしかないという事か。

「勝負するのか？」

二人の獣人の行動に痺れを切らした様にカリューがシャインとクロノに近づいた。

その眼は「早く獣人から元の人間に戻りたいんだ」という焦りが見て取れる。

「お、お前は昨日飲み屋から飛び出してきた獣人ニヤ！」

クロノが驚いたように言う。隣のシャインも昨日余程痛い目を見たらしく若干、後方に下がりつつある。

「昨日も言ったニヤン。なぜ、同じ獣人なのに手を取り合つて助け合おうとしないニヤン？」

カリューが唸り声を上げ、背中の剣を両手に構える。

「俺は人間だ！ 勇者カリューだ！」

カリューは吼えたが、今の台詞は二つ共間違つていい。カリューは人間でも無いし勇者でもない。

「力、カリュー？ レッド・ツイスターのカリュー？」

シャインが驚いたように聞きなおす。さすがに一昨日まで人間だったのが突然獣人になつていたら誰でも驚くだろう。

「ははーん……」

クロノが何かに感づいたように言った。

「つまりは俺達獣人の強さに関心して獣人に転職した訳ニヤ……」
クロノが喋り終わる寸前に、カリューの横薙ぎの攻撃がクロノの鼻先をかすめた。カリューの全身の毛が逆立っている。こいつ、ほんと本気だ……。

「そういう事なら照れる事ないニヤン、同じ獣人同士、仲良くするニヤン」

シャインがカリューの隣に来て肩に手を置きながら、火に油を注ぐような事を言った。

カリューは何も言わずに一步後方に飛んで剣を上段に構える。「ねえ、カリュー」

その時、突然秋留がカリューに声を掛けた。カリューの動きが金縛りにあつたようにピタッと止まる。

「とりあえず、鉄の壁から向こう側には戻れなさそうだし、今は決着つけなくとも良いんじゃない？」

優しい問い掛けだが、どこか断れないような凄みのある声だ。

「シャインとクロノも、この洞窟から脱出するためにも暫くお互いに協力し合わない？」

またしても優しいが威圧感のある声を秋留は発した。

こうして、一時的だが奇妙なパーティーが出来上がった。六人パーティーのメンバーのうち半分は獣人。一人はゾンビ。まともな人間は俺と秋留だけという事になる。

「どういう事だ？」

俺は地下洞窟を更に先に進みつつ秋留に尋ねた。勿論聞きたいのは、シャインとクロノを一時的にでもパーティーに加える気になつた理由だ。

「ここで争つてお互い傷づくよりも、協力し合つて先に進んだ方が良いと判断したからだよ」

秋留が後方でワイワイと騒いでいる人外パーティーに聞こえないよう答える。

「我々が頭脳である秋留が言つただから、おそれく間違いは無いだ
う。

確かにこの洞窟には何かがある。俺達を帰したくない何かが……。

第三章 地下洞窟

あの人口の通路から歩き始めて何回目だらうか。俺の後方で再び爆発音が聞こえた。

「あ～クロノ！ また罠を踏んだニヤン！」

シャインが自分の罪をクロノに着せる。煙の中からは身体のあちこちが欠けたジェットが出てきた。その欠けた部分はミミズが這い回る様に自然修復されていく。

「さっきから痛いですぞ！」

いくら不死身のジェットでも、いい加減うんざりしてきた様だ。シャインとクロノはジェットの不死身っぷりが面白いいらしくて、わざと罠を踏んでいる様だ。ゾンビと言えども痛みを感じていると、いう事を、二人はまだ分かつていな。

「シャイン！ クロノ！ あんまりふざけてると魔法で吹っ飛ばすよ！」

秋留が一匹の獣人を叱った。さっきからシャインとクロノは辺りを飛び跳ねているからだ。パーティに加えた事を後悔しているのだろうか？

しかし、どこか秋留も楽しそうだ。

隣には「滝はまだか」と何度も聞いてくるカリューがいる。俺の耳には滝が流れる豪快な音などは全く聞こえてこない。

「お！ 敵だニヤ！」

これも先程から何回か繰り返されてきた事だ。シャインとクロノはモンスターを見つけると、まるで遊んでいるかの様に戦闘を始める。

弱気でのん気なクロノと強氣でお嬢様気質のシャイン。まるで正反対の性格の二人がピッタリと合った呼吸で出現したモンスターを即行で倒していく。

「実際凄いもんだな」

カリューが一人の戦闘を見ながら関心して呟いた。

「さつき聞いたんだが、シャインとクロノのレベルは七とか八らしい」

カリューの今のレベルが四十一だから数値的に見ると到底敵うようなレベルの差ではない。カリューとの戦闘を考えると、なかなか良い線をいついていた様に見える。

「一人の息がピッタリなら、その力は足し算ではなく掛け算になるという事かな」

俺は頭に思い浮かんだ格好良い台詞を秋留に聞こえるように少し大きめの声で言った。

「ガウウウウウ……」

俺の声に反応する様に、洞窟の奥から灰色の身体をした熊の様なモンスターが現れた。

「ブレイブ！ 大きい声出しすぎだよ！」

うつ、秋留に注意されてしまった。

再びシャインとクロノは喜びの声を発しながら灰色熊モンスターに攻撃を仕掛けた。シャインが右手を灰色熊に繰り出す。しかしその攻撃がまるで水を切るかの様に身体の中をすり抜けた。

「フニャ――！」

シャインが灰色熊の体の中をすり抜けた右腕を叫び声と共に素早く引き抜く。その腕からは白い煙が上がっている。

それを見たクロノは、足元にあつた岩を熊の顔面に蹴りつけた。顔面へ飛んで行つた岩が体内に取り込まれて一瞬の内に溶かされる。その間にクロノはシャインを抱きかかえて熊の目の前から離脱する。そして少し離れた所に着地すると手早く回復魔法を唱え始めた。俺は松明を熊の前方に落とした。灰色をしていたはずの熊の毛並みが真っ赤に変わる。

「液体だ」

俺が見た灰色の毛並みは、熊の身体の向こう側の岩が見えていたに過ぎなかった。

その熊の身体から垂れた液体が足元の松明を消す。

「また厄介なのが出てきたな」

カリューが剣を構えて言う。しかし奴に攻撃をしかけた時点で、剣が溶かされる事は眼に見えている。しかもダメージを与える事が出来るかも分からぬ。

「任せて」

秋留が両手に杖を構えながら全身する。

「女王シヴァの口づけば全てを凍らし、その抱擁は全ての自由を奪う……」

秋留の呪文の詠唱と共に周りの気温が低下していく。隣にいる俺も寒くなってきた。

「アイスバインド！」

秋留の呪文と共に氷の塊が液体熊目指して進んでいった。氷の塊が液体熊に当たった途端に熊の氷像が完成した。

「やつたか？」

カリューが氷像を見つめながら言つ。だが氷像からうつすらと湯気が立ち始めているのが見える。

「駄目！ 伏せて！」

秋留の叫び声と同時に氷の塊が四方八方に飛び散った。俺はその一瞬に全神経を集中してネカーとネマーをぶつ放した。秋留と、シャインを回復しているクロノに飛んでいく破裂した氷の塊を片つ端から打ち落とす。

俺に飛んできた氷の塊はカリューが剣を振り回して落としたが、カリューが俺を守つて何発か食らつたようだ。

「サンキュー」

俺は尚もネカーとネマーを構えながらカリューに言つた。

「弱者を守る事こそ正義！」

カリューは背中で語つている。相変わらずな性格は獣人になつても変わらないようだ。

ちなみにジェットは不死身のため、弾丸のフォローはしなかつた

が、まあ大丈夫だろう。

俺は液体熊に再び視線を移した。

氷と化したのは周りだけだったようだ。サイズが一回り小さくなつたが、まだまだ襲つてくる気満々らしい。

「何回か凍らせればそのうち無くなるんじゃないか？」

カリューが無神経な事を言つている。

俺が氷の塊を打ち落とすのに相当な精神力を要した事を分かつていない。

「もつと強力な奴ないのか？」

俺は秋留に聞いた。

「氷系の魔法はあんまり得意じやないの。かといって風とか火はどうなるか分からないし」

その台詞を聞いていたのか、右手を抑えながらシャインが立ち上がりつた。

「まだ回復終わってないニヤ！」

隣でシャインを回復していたクロノが言つ。

「やられつ放しじや、獣人として情けないニヤン！」

シャインは気合を入れると魔法を唱え始めた。

「迫り来る影は凍える吐息、生命の息吹を止めるクサビとなれ」

俺と秋留がヤードの通りを逃げている時にシャインが唱えた呪文だ。どうやらシャインは氷系の魔法を得意としているらしい。

「チエイスフリージング！」

シャインの両手から眼に見える程の濃い冷気が、液体熊に向かって突き進む。

その冷気が液体熊を取り巻き、一瞬のうちに氷の彫像を作つた。暫くしても氷の彫像はそのままだ。

「やつたニヤン」

それだけ言つとシャインはその場に倒れた。

「シャイン、大丈夫ニヤ？」

シャインを背負つているジェットに向かつてクロノが尋ねた。

俺達は氷漬けとなつた液体熊を後にして、更に洞窟の奥へと進んで歩いている。

「大丈夫だよ、氣を失つてはいるだけだから。クロノは回復魔法が得意みたいだね」

秋留がクロノの隣を歩いて言つ。

「そ、そんな事ないニヤ」

真つ黒な毛に覆われた顔を赤らめながらクロノが言つた。

あれから特に危険なモンスターが出現する事もなく、一時間程洞窟を歩いている。

途中で松明が燃え尽きたが、道具袋にはまだ予備の松明が入つている。

シャインの性格や癖をクロノが暴露しながら歩いているうちに、俺達は再び人の手で作られたと思われる通路へと辿り着いた。

通路は三人が並んでやつと通れるくらいの幅しかないが、奥行きは百メートル位ありそうだ。魔法の力で輝いていると思われる松明程の大きさの石が通路の所々を照らしている。

「あ、明らかに怪しいな」

正義しか頭にない阿呆なカリューでもこの通路の危険さは分かつたようだ。通路の左右の壁には、硬貨大程の不気味な穴がびっしりと開いている。

俺は他のメンバーに待つてはいるようになに合図すると、一人通路に進んで壁や床、天井を調べ始めた。

この通路の床全体がスイッチになつてているようだ。床を踏むと壁の穴から何かが飛び出でてくる仕掛けらしい。まあ、罠の王道といったところか。

俺は試しに傍に落ちていたゴブシ大の石を掴むと、通路に向かつて強めに放り投げた。

石が落ちた場所の左右の壁から鋼鉄製の矢が通り抜け、壁の反対側の穴へと入つて行く。

「なるほど……。矢を無駄にしない効率的な罠の様だな」

俺は一人で呟きながら、後方で待っていたパーティの元に戻つていった。

「どうしようか？」

秋留が腕組みして言う。

「穴の中をちょっとと覗いてみたんだ」

俺は少し自慢しながら言った。

「うーん……よく見えるニヤー」

同じ盗賊であるクロノが言う。確かにある程度経験を積んだ盗賊じゃないと、暗闇を見通したり細かな罠の作りに気づくのは難しいかもしねりない。

まあ、獣人だから夜目は効くかもしれないが。

「矢を射出する装置は通路に並んだ三人分位の長さしかないんだ」

俺は地面に小枝で図を書きながら説明を続けた。勿論説明している間も俺の視線は常に秋留を捕らえている。

「魔法とかで巨大な岩を通路の向こう端に落とす事は可能か？」

秋留が火と土系の魔法が得意なのを知つていて聞く。

「ふうーん……任せてよ。誰の体重よりも重い岩を出現させてあげる」

盗賊の職に就いたこともある秋留が俺の意図を察したらしく答えた。

カリューやジェットは俺と秋留の会話を聞いても理解出来ないらしい。盗賊であるクロノの頭の上にもクエスチョンマークが浮かんでいる。

「ここの罠は床に乗っている一番重い場所に対して矢を発射するんだ」説明終了の合図に、持っていた小枝を放り投げて言う。

「矢が向こう端の岩を狙っている間に俺達は岩のある所まで安全に歩く。向こう側に着いたら通路の反対側に更に重い岩を出現させて矢射出装置を移動させる。それでメデタク、ステージクリアだ！」準備を整えると秋留が俺の指示通りに呪文を唱え始めた。

「力強き腕を持つノームよ、汝の力で巨岩を操り、我に仇名す全ての者を押し潰せ……」

秋留は呪文を唱え、右手を高く掲げた。

その動作と共に近くにあつた巨大な岩の塊が宙に浮かぶ。

「ロックストライク！」

秋留が右手を勢い良く振り下ろすと同時に、宙に浮かんでいた岩が通路を突き進み、轟音を発して通路の終端に落ちた。

岩が通路の終端に落ちた途端に今まで手前にあつた矢射出装置が一瞬で通路の一一番奥まで移動し、巨大な岩を鋼鉄の矢で攻撃し始める。

「よし、今のうちに行こう

俺はパーティーの先頭に立つて通路に足を踏み入れた。俺の予想通り、矢は一番奥の岩を攻撃し続けている。

俺が足を踏み入れたのを確認してから他のメンバーも続く。
「あ、そうそう、言い忘れてたけど……」

俺は後ろを振り返つて言い掛けた途端に、今まで一番奥で岩を攻撃していた罠が俺達の方へ近づいてきた。

俺は仲良く並んで歩いていたジェットとカリューの姿を睨みつけ、思いつきりカリューを蹴飛ばした。カリューは俺の咄嗟の蹴りにより通路から吹き飛ばされる。

「い、痛つてーな！ ブレイブ！」

カリューが尖った歯を剥き出しにしながら唸る。

「言い忘れたけど、岩より重い体重を通路が感知すると、罠が移動して蜂の巣になるから気をつける様に。特に油断して並んで歩いたりすると危険だぞ」

俺は何事も無かつたかのように再び歩き始めた。罠は再び一番奥の岩を攻撃している。

「だからって俺を蹴る事ないだろお！」

青い毛並みから覗く顔を真っ赤にてまだ怒っている。

「だからってシャインを背負っているジェットを蹴る訳にはいかない

いだろ？」「

俺の台詞にカリューは黙つたが、口が達者な秋留なら俺のこんな台詞にすぐ反論出来る事だろ？

「私が操つた岩は、ジェットとシャインの体重以上はあるから安心して良いよ」

少しふりついていたジェットとクロノを安心させるように秋留は言った。あ、その事は考えてなかつた……。

その後もカリューはブチブチと文句を言つていたが、俺の作戦通りに無事に矢通路の罠はクリアした。

「さすがブレイブ。うまくいったね」

秋留が俺の背中を叩いて言つ。褒められる事に慣れていない俺は何も返事が出来なかつた。心なしか顔が暑い。
ちなみにジェットとシャインの体重を足す事を全然考えていなかつたとは言つていない。

「ふう、そろそろ休憩しませんかな？」

矢の罠から更に三十分程歩いたところでジェットが言った。

シャインを背負つているせいか、ジェットの息が上がつている。「そうだな。ここは少し広くなつていて、ちょっと休憩するか」

カリューが辺りを見渡して言つ。

俺達は荷物を降ろしてその辺の岩に座つた。神経を張り詰めていたせいで、眼が疲れて肩が凝つた。

眼を瞑り軽く肩を揉み解した。

「盗賊の仕事つて見た目以上に疲れるんだよね」

そう言つて秋留の手が俺の肩に置かれる。これから何が起こるのか必死で頭を回転させたが、頭が真っ白になつていて動かない。

「お客様、気持ちいいですか？」

秋留が俺の肩を揉みながらおどけて言つた。

「お、おつ……」

今日は人生で最良の日に違ひない。しかもお世辞無しに秋留のマツサージは気持ちいい。傷を癒すような魔力も込められているのか

もしれない。

「いいですね、若いもんは」

ジョットがからかつた。俺は自分の顔が赤くなるのを感じた。

「プレイブがミスつたら致命的な罠にはまりかねないからね」

照れなっても良いのに、と俺は心中で思いながら辺りを見回した。

「この洞窟……まるで侵入者を試しているかのようだ。どれも即致命傷になる様な罠が仕掛けられていない。

洞窟の中に死体がない事も気になる。

定期的に何者かが片づけているのだろうか。その人物はこの洞窟に作られた罠を知っている。罠の作成者かもしない。

とにかく今は前に進むしかなさそうだ。ゴールで洞窟の主の目的が分かるに違いない。

暫くしてシャインが眼を覚ました。秋留と同様、寝起きは余り良くなない様だ。

それから俺達は軽い食事を取ると、再び洞窟の奥田指して歩き始めた。

長く続く洞窟に皆、疲れが溜まつて来ていた。

定期的に襲つてくる、この洞窟特有のモンスターの存在も手強いものとなってきた。

「いい加減、きりがないな！」

目の前の大根の様な頭を持つ人型モンスターを切り捨ててカリューが言つた。

何匹ものモンスターを捌いているのに、疲れを全く見せないあたりがカリューラしい。

少し前まで元気だったクロノとシャインも今では、戦闘にも飽きたらしくグッタリとしている。

「この洞窟を出たら、皆で豪華な宿に泊まって豪華な食事をしようね」

秋留が全員を元氣づける様に言つた。俺に対しては一百パーセントの効果を発揮する秋留の励ましも、他の奴らには大して効果がないようだ。

意気消沈のまま進むこと一時間。

俺達は人工的に作られた大きめの部屋の前までやつて來た。大分前に通過した矢の通路と同様に魔法の松明が部屋の中を照らしている。

床には罠が作動するような突起物が所狭しと並べられていた。俺は一人、両膝をついて床の突起物を調べ始めた。少し調べて全ての突起物は罠が作動しないようにガードが掛けている事が分かつた。

この罠を作成した主がうつかりスイッチを入れ忘れたのだろうか？「とりあえず、床の突起物は大丈夫そうだ。だけど何が起こるかわからないから、踏まないでくれよ」

俺が言うとパーティーのメンバーが無言で頷く。

俺の予想通り、床の罠は作動しない様だ。しかし油断しない様に気を張り詰め、辺りを観察しながら部屋の中を進む。

その時、この部屋の近くに人の気配を感じた。と同時に足元の罠が一斉に作動する。

頭上から何かが開く音がして大量の水が流れ始めた。

「！　い、急いで部屋から出るんだ！」

俺は叫んだが時既に遅く、部屋の出口が分厚い鉄の扉で塞がつた。後方を確認すると、そこも既に鉄の扉で塞がれていた。

「ちつ！　とりあえず全員、動かないでくれ！」

頭上から流れてくる水の音に負けないように声を張り上げる。どういう事だ。

誰も罠は踏んではいない。確かに床の罠は作動していなかつた。

「何が原因で罠は起動したんだ？」

「また罠踏んだのニヤン！　クロノ！」

俺の後方でシャインがクロノを攻めている声が聞こえる。

「今度こそ踏んでないニヤ！」

「ちょっと静かにしてくれ！」

いらっしゃながら俺は叫ぶ。この罠を見抜けなかつた自分が悔しい。大して広くない部屋にはあつという間に水が溜まり、今では膝下まで水に浸かっている。

天井を見上げ罠が停止しそうな仕掛けがないか確認する。だが怪しそうな突起が多くてどれを狙えば良いのか分からぬ。同じく怪しげな突起が壁にも沢山並んでいた。

「これなんか怪しいニヤン」

「勝手に動いたりどこかに触つたりするんじゃねえ！」
壁に手を伸ばそうとしたシャインに怒鳴る。水の音が邪魔をして頭の中が集中出来ない。

「ブレイブ、怖いニヤン……」

水が膝上まで溜まってきた。いくら夏場の水だからといって、ひんやりした洞窟の中の水は俺達の体力を確実に奪つてくる。

「な、何か変な虫が飛んでるニヤ」

クロノは頭上を飛んでいる金色の虫を煩そうに払いのけた。
「ば、ばかっ！」

俺は叫んだが、クロノはバランスを崩して倒れそうになつた。
駄目だ！ 変なスイッチを踏むのは危険過ぎる！

「クロノ、気合で耐えるニヤン！」

シャインが無茶な事を言うが、もちろんそんなもので耐えられるはずもなく、クロノの体勢は一層危なくなる。

だが秋留の背中から伸びたマント、ブラーードーがクロノの身体を包み込んだ。

「氣をつけてね、クロノ。死にたくないでしょ？」

秋留の台詞と共にクロノの顔の目の前までブラーードーの爪が伸びる。

「い、以降、氣をつけるニヤ……」

ブラーードーに体勢を立て直してもうつたクロノが申し訳なさそうと言つた。秋留は怒らせると怖いんだな……。

「ブレイブも落ち着いてよ。ブレイブならこんな罠、ちょちょいのチョイでしょ？」

秋留が笑顔で俺に話し掛ける。まるで天使の微笑だ。その微笑には回復効果もあるのだろうか。

「おい！ ブレイブ！ いつまでもボケ～つとしてないで、いい加減何とかしろ！」

悪魔の様な面をしたカリューが怒鳴る。

いつもの仲間達との会話のお陰で少し落ち着いてきた。

今では腰辺りまで水が浸かつて来ている。ジェットはあまりの寒さのためか、あまり動かなくなっている。正に年寄りの冷や水……。でもゾンビだよな？

俺は仲間達の顔を眺めながら五感を研ぎ澄ませた。

「クロノ、シャイン、後少しだからもう少し辛抱してくれな」

俺は今度は落ち着いて部屋全体を眺めた。今まで落ち込んでいたクロノとシャインにも笑顔が戻ったようだ。

まずはこの罠……。なぜ発動したかを考えよう。

誰も罠は踏んでいないはず。そして、罠が発動した時に感じた何者かの気配……。

罠には大きく二種類ある。一つは侵入者がスイッチ等踏んで発動する自動罠。もう一つは何者かが罠を発動させる手動式の罠。

今回は後者の手動式が怪しい。誰かが俺達の事を監視しているのだろうか。そうなると、通路に死体がない事の説明がつく。そいつがこの洞窟を管理しているのだ。

「ブレイブ殿～、まだですかな～」

震えながら紫色の唇でジェットが言った。

とりあえず洞窟の管理者の事は後回しにしよう。

俺は再び天井や壁を見渡す。

あまり高くない天井。俺が秋留を肩車すれば何とか秋留の手が届きそうな天井だ。

この部屋が一杯の水で満たされたとき、俺達は死を迎えるのだろう

う。

ん?

でも壁の高い場所でうつすらだが、水垢の様な線が見える……。
それとは別に壁最上部にも水垢の線が見える。こっちの方の水垢の方が断然濃い……。

つまり、この部屋の水は一杯にならない条件があるという事か。
それを見つける必要がありそうだ。

「さ、寒いニヤ

「冷たいニヤン」

背の低いクロノとシャインは既に水に浮いている。早く罠を停止させる方法を見つけないとやばいかもしない。壁の最上部に水垢の線が見えるという事は、この罠は侵入者を殺す事も出来るという事なのだ。

「大丈夫だよ、ブレイブ。落ち着いて……」

寒そうに秋留が言う。

その力ない言葉に俺は五感を一気に研ぎ澄ました。これ以上、秋留に辛い思いはさせない。

俺は眼を閉じ、耳に神経を集中させた。

そういえば、さつきよりは五感を研ぎ澄ますのが容易になつてい
る。秋留の言葉のお陰だらうか……。

いや、違う。

それだけではない。

さつきよりは、天井から流れる水の音が小さくなっている。
まさか……。

「みんな……泳げるか?」

俺は首元まで溜まつた水から首を伸ばして言った。
全員頷く中で、秋留が自信無さそうに頷く。

「秋留、大丈夫か?」

心配そうに俺が聞くと、秋留は笑顔で答えた。

「暫くの間なら何とかなるよ……」

「やばくなつたら俺にしがみつけよ。水に浮いぢやえれば、どんなに動いても罠にはひつかからないから」

頼れる男を精一杯アピールしとく。

暫くして全員の身体が水に浮いた。

ジョットは器用に立ち泳ぎをし、シャインとクロノは水の上で寝ているように普カプカと浮いている。

カリューは獣人の影響なのか、犬かきだ。

心配そうにしていた秋留は始めは平泳ぎをしていたが、今は苦しそうに犬かきの様な溺れている様な危うさでバランスを取っていた。俺は泳いで秋留に近づくと、肩を掴んだ。

「あんまり無理すんなよ。俺に掴まつていいから」「あ、ありがとう」

息を切らしていた秋留は、ほっとしたような顔を見せた。水位を見ると丁度水垢の線が見える所だった。俺の予想通り、天井からの水が急に途絶える。

「お？ 水が止まりましたな」

ジョットが死人のような色の悪い顔で言つ。

一同、次に何が起こるのかを待ちわびる……。

「ねえ、プレイブ。この後、何が起こるの？」

俺の背中のカバンに捕まりながら秋留が言つた。

さあ、俺も知らない……と心の中で呟く。

と、仕掛けが動く豪快な音と共に目の前の壁が開いた。

水と一緒に部屋から流れ出る俺達。狭い通路を水に舞う木の葉の様に流れ落ちる。

「あははは～～」

秋留が楽しそうに笑つてゐる。じつじつ絶叫系な仕掛けは好きなのかもしれない。でも俺の耳元で叫ぶのは止めてくれ。

どこかに水がぶち当たる轟音。

『いってええ～！』

俺達は一斉に叫んだ。水の流れが行き着く先はまた別の部屋。俺

達は仲良く部屋の床に全身を打ちつけた。

そこには見渡す限り、真っ白なモンスターの山……。

「全員、戦闘態勢～～～！」

叫びと共にカリューが勢い良くモンスターの群れに突撃する。それを追つてクロノとシャインも飛び出す。

俺と秋留とジェットは腰をさすりながら、寒さでブルブルと震えている。

「まあ、あいつらに任せとけば何とかなるつしょ」

俺が言つと秋留は頷いて、魔法で目の前に小さな炎を出現させた。その炎で温まりながら、元気な三人組みの戦いつぶりを観戦する。危なさそうな時はネカーとネマーでフオローをする事も忘れてはいない。

「そういえば、さつきの水攻めの罠……どうやつて解除したの？」
秋留がジエット愛用のお茶セツトで沸かしたお茶で温まりつつ聞く。

「何もしない、罠を解除する方法さ。何もしていない状態でどんどん水の入つてくる量が減つていつてたみたいだからな」

『ほお～』

ジエットと秋留が仲良くお茶を飲みながら感心した。

「いやあ、身体を動かすと温まるよなあ」

カリューが隣を歩くクロノとシャインに話しかける。
元気な三人組の後ろには、モンスターの死体の山。

「お前らもちよつとは運動しろよなあ！」

カリューが右手に持つていた剣を鞘に收めながら言った。

『とりあえず腹が減ったニヤ、ニヤン～』

育ち盛りのクロノとシャインが声を合わせて言った。

「結構、長い洞窟だよなあ」

カリューが先の見えない暗闇の通路を確認して言う。

俺も少し湿った干し肉を食べながら通路の奥を確認した。何かが蠢く不気味な音。近くで焚き火をしているせいか、こぢらに近づこうとはしない。

どこかでこの洞窟の管理人も俺達の姿を見ているに違いない。陰険な奴め。今に見ている……。

「こんなに深い洞窟なんて思つてなかつたから、食料が無くなりそうだよ」

秋留が食料用のカバンの中を見ながら言う。

「ただ飯食らいが二人いるしなあ」

俺はクロノとシャインを睨みつけて言つた。一人は無心に干し肉を頬張つていて聞こえていないようだ。

「ちょっと寝ませんかな？　きっと今は夜ですぞ」

やたらと人間臭いゾンビのジェットが言う。

「しょうがないな。少し仮眠するか。俺が見張りをしててやるよ」
ジエットよりもむしろカリューの方が疲れを知らないゾンビの様だ。

「そろそろ起きる〜！」

寝た気があまりしない内に秋留に起こされた。途中で秋留が見張りを代わつたようだ。一人の話だと五時間位は寝てたみたいだが本当だらうか。空が見えないせいで時間の流れが全然分からぬ。

俺達は再び洞窟を奥へと歩を進めた。時折襲つてくるモンスターは相変わらずカリューが手早く仕留めている。

「な～んか、キリがないよな」

ボソッと呟く。この台詞を聞くのも何度目だろうか。

「無いニヤ」

クロノの眼には明らかに疲れの色が見える。まだ若いために体力がないのだろう。

「そういえば、クロノとシャインは何歳なんだ？」

俺は気晴らしに世間話をしてみる事にした。今は一時的にパー

イーを組んでいるが、俺達はクロノとシャインの事を全然知らない。

「あたしもクロノも十四歳くらいだニヤン」

お喋りが好きそうなシャインが隣に来て答える。「くらい」か。
…。色々苦労してんだろうな。盗賊をやつてこるのにも理由があるんだろう。

「くらい? 誕生日分からないのか?」

無神経なカリューが聞く。

「僕達、捨て子なんニヤ」

クロノが寂しそうに答えた。それを聞いて氣まずい顔をするかと思^いきや、カリューは豪快に笑って答える。

「そうか! ジャあ、お前らの強さは生きるための力だつたんだな!

!」

どこまでもプラス思考な奴め。

カリューの台詞を聞いてまだまだ子供なクロノとシャインが苦笑^いをする。まあ、反応し難いわな……。

第四章 絶叫

世間話に花を咲かせながら更に進み、そろそろまた休憩かな、と思つ頃に田の前の通路が突然途切れた。

「え？」

秋留が思わず疑問の声を発する。

「いやいや、行き止まりのはずはない」

俺は目の前の通路をくまなく調べた。右下に小さなボタンを見つけた。おそらく、目の前の偽物の壁を開くための仕掛けだろ？
仲間に確認する事なくそのボタンを押すと、音も無く田の前の壁が左右に開いていった。

壁の向こうには通路と同じ位の広さの部屋。

その真ん中には一本の線路と、それぞれの線路の上に木製の小さめなトロッコが一台ずつあった。

「おお！ これはまさか～」

嬉しそうに秋留はトロッコに近づく。

ダンジョンにありがちなトロッコ。絶叫物が大好きな秋留には溜まらない一品に違いない。

俺は両方のトロッコと線路を調べたが特に異常は見当たらなかつた。

線路の先は急傾斜になつていて、その先は真っ暗な穴が口を開けて待つている。

「誰がどっちに乗るんじや？」

ジョットが不安そうに尋ねる。あまり絶叫物は好きではないのかかもしれない。そもそもお年寄りに絶叫物は禁物だろう。万が一、心臓が止まつたら只事では済まない。

「線路の先が同じ部屋に繋がっているとは限らないし。慎重にメンバーは分けた方が良さそうだね」

トロッコに乗りたくてウズウズしている秋留が冷静に答える。さ

すが我らの頭脳。今はアドレナリンが出まくつてそうだが。

「とりあえず、石投げてみよう」

俺は足元に転がっていた石を左の線路の先に放り投げてみた。

石は口口口と音を立ててすぐに止まる。一応地面はあるし、急傾斜ではないようだ。

石をもう一つ拾つて右の線路の先にも投げてみる。暫く落下してから口口口ロンと小さな音が聞こえる。

「とりあえず両方とも穴を入つてすぐに御陀仏という事は無さそうだな。トロツコの大きさからいつて、三人ずつ分かれた方が良い……」

俺は全員に説明する。

気づくと、秋留は既に右のトロツコの先頭に座り、しつかりと前方を睨みつけていた。

「途中で死んだりしないじゃろつな？」

ビクビクしながら、死人のジョットが言つ。ジョットはそれ以上死ねないから安心しる。

「この洞窟を作つた奴は罠には必ず抜け道を作つてきている。今回も下手をしなければ死なないと思うぞ」

俺の台詞にジェットも少し安心したようだ。

「とりあえず、わしは左のトロツコに乗らせてもらひたいですな」俺の放り投げた石の音を聞いていたのだろう。傾斜の少ない方をジェットは選んだ。

「そうすると、俺は秋留と同じトロツコになるかな」

理由を述べずにさりげなく秋留と同じトロツコに乗る。

「ちょっとプレイブ！ ちゃんと考えてトロツコに乗つていいの？」秋留が振り向いて言つ。「俺も絶叫物大好き」という一言に秋留は黙つて再び穴の奥を睨み始めた。

「戦力的に考えて、俺がプレイブの後ろに乗るかな。クロノとシャインは一緒の方が強いし」

リーダーのカリューだけが唯一戦いの事を気にしているようだ。

まあ、ここにも度胸はあるだらうから、右のトロッコでも心配ないだらう。

クロノとシャインは仲良しのジェットの前に座る。勿論、ジェットは一番後ろの座席に座っていた。

「じゃあ、それぞれ出発するか！」

俺はネカーとネマーをそれぞれの線路の後方にあるレバーに向けて構える。これが出発用のスイッチである事は確認済みだ。

「また生きて会えると良いな。しゃつぱーっつ！」

俺の台詞に涙眼になつたジェットと黒猫一匹が乗つたトロッコが先に出発した。

勢い良く傾斜を降りてつたトロッコからジットの悲痛な叫び声とクロノとシャインの楽しそうな声が聞こえてくる。

やがて穴の奥に進んでいったのか、三人の喜怒哀楽にとんだ声は聞こえなくなつた。

「ブレイブ！ 私達も早く出発しよー。」

秋留が嬉しそうに言つ。

俺は「おつ」と答えるとネマーのトロッガを引いて、トロッコを出発させた。

田の前の傾斜にトロッコが吸い込まれ、一気に加速する。

「ウオオオオン！」

後ろではカリューが獣の雄叫びを上げている。

前からは秋留の楽しそうな笑い声。俺は左右の手すりに必死にしがみついた。

一体、何度の傾斜なんだらう。落下しているんじゃないだらうかと錯覚してしまつ。

周りの景色があつといつ間に通り過ぎていく。さすがにちょっと怖い。前に座つた秋留はこれでもかといつに楽しそうだ。

線路の傾斜が少し緩やかになつたと思うと右に急カーブ、少し落ち着いたかと思つと左に急カーブ。さつき食べた干し肉が出てきそうだ。

「きやはははは」

いつもクールな秋留の笑いとは思えない。相当、絶叫物が好きに違いない。

暫く上つたり下つたりを繰り返し、今は平坦な道をトロツコは進んでいる。

「何か落ち着いたやつたなあ。つまんないなあ」「

残念そうに辺りをキヨロキヨロしながら秋留が言つ。

「この洞窟の製作者は、俺達を飽きさせないように色々仕掛けを用意しているみたいだぞ」

通路の先に不気味な風切り音を聞いた俺はネカーとネマーを構えた。それにならつて秋留も杖を構える。飛び道具の無いカリューも俺の後ろで一応剣を構えているようだ。

目の前を横切る巨大な鎌。それが十メートルおき位にブォンブォンと音を立てて揺れている。

「このトロツコにブレーキとかスピードアップするような機能はついてなかつたぞ」

ネカーとネマーから発した硬貨がむなしく鎌に弾かれるのを見ながら言ひ。

「カリュー、トロツコから手を出せば、構えている剣で地面に届くよね？」

秋留が冷静に判断して言ひ。つまりカリューの剣でブレーキスピードアップをやらせようという訳か。

秋留の考えがカリューにも伝わつたらしく、大鎌の目の前で地面に剣を突き立ててトロツコのスピードを落とす。

「スピードアップ！」

大鎌が通り過ぎた瞬間に発した俺の声と同時に、カリューが剣で地面を引っかきトロツコを加速させる。

カリューの地道な作業を繰り返し、何とか大鎌のトラップを抜けた。

抜けたと同時に天井が開き、後方に巨大な鉄球が姿を現した。

「微妙な傾斜になつてゐるから、あの鉄球、こゝちに転がつてくるな……」

後ろを振り返りつつ落ち着いて解説する。

いい加減、洞窟の数々のトラップに慣れてきたのか、何事にも驚かなくなつてきていた。

無駄だと知りつつも一応、硬貨をぶつ放してみたが、予想通り巨 大な鉄球に弾かれた。

「頑張つて、また漕ぐかあ！」

カリューが再び地面を剣で引っかく。少しは加速したが、後方の 鉄球はどんどんスピードを上げてきている。

「秋留、何か良い魔法ないのか？」

前方を眺め秋留に尋ねる。

「トロッコがせまくて、杖が振れないんだよねえ。簡単な魔法なら 唱えられるけど、あの鉄球には効果なさそうだよ」

うーん、どうじょう。俺の真後ろではカリューが必死に地面を引 つかいてトロッコのスピードを上げている。

「いい加減、ちょっと焦らうぜー！」

俺達の落ち着いた会話に危機感を持ったのかカリューが怒鳴つた。 確かにそろそろ真剣に考えないと危険な気がする。

俺はこの鉄球がやつと通れるような狭い通路に何かないか見渡し た。

待てよ？ やつと通れる……？

俺はネカーとネマーで左前方の少し脆そうな壁目掛けて硬貨をぶ つ放す。俺の予想通りに壁が大きく崩れた。危うく線路にまで砕け た岩が来そうになつて少し焦つたが……。

俺達のトロッコは崩した壁の脇を何の問題もなく通り抜けた。一方、巨大な鉄球は隙間の無い通路に現れた突然の岩によつて行く手 を阻まれた。

「さすが、ブレイブ！」

後方で鉄球が止まるのを確認して秋留が俺の事を褒めた。

暫く進むと線路の右側に鉄球が丁度收まりそうな大きさの穴が開いているのが見えた。きっとここまで頑張つて逃げ切れば、鉄球はこの穴に落ちていくのだろう。

「ねえ、あれなんだろう?」

秋留が前方の線路の間に設置されている不気味な装置を指差して言つ。はて? 何だろう?

試しに俺は不気味な装置目掛けて、硬貨を放つた。

線路の間がパカッと開いて突風が噴出され、俺の放つた硬貨が装置前方の急な上り斜面の方へと消えていく。どうやら加速装置の様なものらしい。

「次は上りみたいだね」

硬貨が凄い勢いで消えていくのを見て動搖する事もなく、秋留が嬉しそうに言つた。

「こ、このトロッコ、いつになつたら終着点に着くんだ?」

カリューが後ろで愚痴つている。確かにさつきから肩に力が入り続けているせいで、いい加減疲れてきた。

とうとう加速装置の場所をトロッコが通り過ぎた。顔面が後ろに引っ張られるような圧迫感を伴い、俺達の乗るトロッコが勢い良く急な上り坂を上つていく。後ろからはカリューの雄叫びが聞こえた。

「う、うおお……凄い勢いだし、な、何か……」

あまりのトロッコのスピードに身体が流されそうになるのを必死に堪えて言つ。この坂、今や垂直な壁を上つている。いや、さかさま?

「つきや きやーー」

「うわあ あああああ

「ウオオオオオンツ」

なんとトロッコはグルリと一回転した。そしてその勢いのまま、急な斜面を再び下つしていく。

「きやはは〜、楽しかったね」

秋留が元気に尋ねて来るが、俺はあまりのショックに返事が出来

なかつた。後ろではカリユーが気を失つてゐるようだ。

一回転した余韻がまだ残つてゐる状態で次は通路の両端の明かりが一斉に灯る。お陰で大分先まで見渡せるよつになつた。

「分かれ道！」

秋留の後ろから前方を覗いて咄嗟にネカーとネマーを構える。

前方で線路が一手に分かれているのだ。その中間には切り替えスイッチのようなものが見えた。

状況を理解した俺はトリガを引いて、硬貨を切り替えスイッチに当てる。

トロツコは分かれ道を左に進んでいく。

「右はどうなつてたの？」

「壁に激突」

既に次の分かれ道が見えていた俺は、秋留の質問に手早く答え、通路の先を確認する。

そして素早くネカーのトリガを引いて切り替えスイッチに当てた。トロツコは線路の無くなつていた左ではなく、右の線路を走る。それにして、これじゃあ神経の休まる暇がない。先ほどから極度の緊張の連続で意識が朦朧としてきていた。

「カッコいいよ、ブレイブ。その調子で頑張つて～」

秋留の天使の呼び声で意識が一気にハツキリとした。俺が意識を失つたら、誰が秋留を守るんだ！

俺は次々に切り替えスイッチを狙い、俺と秋留の乗るラブ・トロツコを導いていく。

「それにしても、こんな危険な罠が一杯のトロツコ、ジェット達は大丈夫かな？」

分かれ道もなくなり、再び平坦な線路を走るトロツコの上で秋留が心配そうに言つた。

「まあ、クロノもシャインも一応盗賊だからな。何とかうまくやつてるんじゃないかな？」

あいつらの追跡能力を思い出して答える。しかしトロツコの上じ

やあ追跡能力なんて意味ないかな。

その時、俺は近くに別のトロッコの存在を感じた。水攻めの罠を作動させたこの洞窟の製作者か？

一人考えていると、突然左側の壁がなくなり、その向こう側に別の線路が現れた。

「あ～、秋留達だニヤ～」

聞き覚えのある声が細い洞窟の中にコダマする。

「元気だつた？」ジエット大丈夫？」

秋留が別トロッコに乗ったジエット達の事を心配して尋ねる。

「首やら腕が何回か無くなりましたか、何とか生きてるですじや～」ジエットが怖い事を言つ。やはりあの黒猫達の盗賊の腕じゃあ、トロッコを襲う数々の罠を超える事は出来なかつたか。

「あ、お前ら進路間違えただろ？」

俺はジエット達の乗るトロッコの前方を確認して言つ。

「壁」

ジエット達のトロッコからも良く見えるように、別線路の前方を指差して大声で言つた。

「ぬあああ！」

『フニーヤーーー！』

ジエットの悲鳴とクロノとシャインのステレオの叫び声が洞窟内にコダマした。

「俺達の線路を歩いてついて来い～！ 分かれ道には目印つけとくから～」

ジエット達の乗るトロッコの破壊音に負けない様に声を張り上げる。頑張つてついて来いなー。

「じゃ、私達も先を急ごつ」

大してジエット達の事を心配していなさうな秋留が言った。

俺は早速分かれ道を確認すると、スイッチを切り替えた。そして後からついてくるだらうジエット達のために線路の上に硬貨を落としておく。

「今日はやけにお金の使いつぶりが良いね」

俺が金袋から硬貨をネカーとネマーに詰め直しているのを見て秋留が言った。

「まあね。たまにはや~」

このカリューから拝借した金袋も大分軽くなつてきたな、と心中で呟く。当の本人は俺の後ろで相変わらず気を失っている。

と突然、左頬の横を何かがかすめた。金袋の重さを確かめていたせいで、何がかすめたのか確認出来なかつた。

「ふせろ!」

俺は秋留の頭を押し下げて叫んだ。

「いっつう~！」

どうやら再び飛んできた何かにカリューの左肩が当たつたようだ。カリューの左肩のアーマーが壊れ、青い毛並みの地肌が見える。進行方向とは逆に飛んでくるせいで、飛んできている物体が何なのか確認する事が出来ない。

俺は狭いトロツコの中で立ち上がり、ネカーとネマーを構えた。揺れるトロツコの上でバランス良く立っていられるのも盜賊としての技能である。

風を切る音を聞き、トリガを引いて硬貨をぶつ放す。トロツコの少し前方で鉱石の様な物が弾け飛んだ。

「この奥に何かいるな」

次々に飛んでくる鉱石を弾きながらトロツコは奥を手指数して進んでいく。この鉱石を飛ばしてくるのは、新手の罠だらうか？

俺はネカーとネマーを乱射して線路の奥の暗闇を攻撃する。何か硬い物に当たつて、硬貨が弾かれる音が聞こえると共に火花が散つた。火花に照らされ、何者かの身体と途切れている線路が一瞬浮き上がつた。

「カリュー！ トロツコ止めてくれ！ 線路が途切れてる！」

俺が叫ぶとカリューは剣を両手で構えて地面に突き刺した。

「なにいいいい！」

思わず俺は大声を上げる。

軽い破裂音と共にカリューの持っていた剣が真ん中から折れたからだ。

その時、秋留が立ち上がりトロッコから飛び降りた。

「なにいい！」

再び俺は大声を上げる。この速度のトロッコから飛び降りたら無事では済まないぞ！

「水の牢獄により全ての者を包み込み、全ての者に残酷なる死を…」

「ウォータープリズン！」

秋留は宙を舞う天使の様に優雅に、そして美しく流れる水の様に呪文を唱える。

秋留の言葉と共に俺と獣人の乗るトロッコが水に包まれた。

確かにこれならモンスターやら壁にぶつかっても、ある程度は衝撃が吸收されるかもしれない。しかし、これじゃあ息が出来ないぞ、

秋留！

水の中から秋留の姿を確認すると、背中の真っ赤なマントが鋭い爪で地面に突き刺さつて秋留の身体を支えていた。あのマント、本当に便利だな。俺も欲しいくらいだ。

秋留の姿に見とれている間に、水に包まれたトロッコが銀色の身体をしたモンスターに激突した。

大きな水泡が破裂すると同時にトロッコがバラバラとなり、俺とカリューは宙に投げ出された。しかし一人とも難なく宙で一回転し、無事に地面に着地する。

暫くの間呼吸が出来なかつたため、またしても頭が朦朧としている。

「秋留！ もう少し考えて魔法唱えろよな！」

もう呼吸が整ったのかカリューが振り返り、秋留に怒鳴っている。

「急だつたから、他に魔法が思いつかなかつたんだよ。それに助かつたんだから良いでしょ」

秋留がこちらに近づきながら答える。

「それよりも……」

俺はネカーとネマーを構えて立ち上がる。目の前には銀色の身体をした巨大なモンスター。こいつは……。

「ダグ」

俺の台詞に他の二人も頷く。

あの秋留一人分位の高さもある巨大なリスの様なモンスターはダグ。以前、魔族の鍛冶屋が飼っていた鉱石を食べて、凄い勢いで吐き出すモンスターだ。しかしあの時とは何かが違う。

「銀色のまま動いてるね」

秋留が冷静に判断して解説した。

そう、以前出会ったダグは息を止めている間は緑の毛並みから全身銀色に変わり、全ての攻撃を弾いていた。しかし、目の前にいるダグは銀色の身体をしたまま動き周り、普通に呼吸もしているようだ。

俺は試しにダグ目掛けてネカーとネマーを乱射したが、全て銀色の身体に弾かれた。

ニヤリと笑つたダグの口から鉱石の弾丸が放たれる。敵の攻撃は見えているのだが、朦朧とした身体が思うように動かせず、鉱石が肩をかすつた。

「ウオオオン」

カリューが四つ足で地面を蹴り、ダグ目指して飛び掛る。獣人が結構板についてきたな。

ダグの口から放たれる鉱石を野生的な勘で避け、ダグの腹に爪を突き立てる。

「いててて」

ダグの身体から飛びずさりカリューは体勢を立て直した。

「こいつの身体、硬いぞ」

間抜けなカリューの台詞に俺も秋留もガックリとする。そんな事、知つてゐるって。

「じゃあ次、私行くね」

そう言つて秋留は一步前に出て呪文を唱え始める。

「水の牢獄により全ての者を包み込み、全ての者に残酷なる死を…」

あれ？ さつき聞いた呪文と同じだ。あのモンスターには効くのだろうか？

「ウォータープリズン！」

銀色のダグの身体を水が包み込んだ。

ダグはそんなお構いなしに、秋留田掛けて口から鉱石を放つた。俺は咄嗟にネカーをぶつ放し、鉱石を破壊する。

「さんきゅ、ブレイブ」

秋留の唱えた魔法はダグに効いてなさそうなのだが大丈夫だろうか。

俺の予想とは裏腹に暫くすると、ダグが苦しみだした。

「いくら硬くても生物だからね。呼吸が出来なければあの通りよ」
その魔法を俺達はクッショーン代わりに使われていたと思うとゾッとする。

「大丈夫だよ。ある程度の素早さがあれば簡単に出れちゃうような魔法だから」

俺の心を読んだのか、秋留がそう付け加えた。

俺達の見てる前でダグは息絶えた。銀色の身体がフヨフヨと水泡の中を漂っている。

「さて、行き止まりだけど何かありそう？」

秋留に言われて、俺は気を取り直し辺りの壁を探索した。
程なくして怪しげなスイッチを発見し、問題ない事を確認して押してみる。

音も無く近くの壁が左右に開いた。

第五章 怪しげな森

一体どれ程の距離を進んだのだらうか。

一体どれ程の時間が経過したのだろうか。

俺達はトロツ「終着駅にあつた隠し扉を開けて、更に洞窟の奥へと足を踏み入れた。

そこは、洞窟にいるとは思えない幻想的な空間。

岩でゴツゴツしていた今までの通路とはうつて変わり、地面には草や花が咲き乱れていて草原のようだ。

至る所には青々とした葉を山の様につけている巨大な樹木がある。

「わあ、何か落ち着く所だニヤン」

シャインが地面の草花の匂いを嗅ぎながら言った。『いつらまだまだ子供なんだなあ。

クロノは少し離れた所で金色の虫を追い掛けている。まるでおもちゃにじやれている子猫のようだ。

俺達がこの部屋に入つてきてから少しして、別ルートを通つていたジエット達が追いついた。

「茶が美味しいですなあ」

どこから取り出したのか、ピクニックシートを草原に広げてジエットがお茶を飲んでいる。隣には秋留も座つて一緒にお茶とお菓子を食べていた。

「ここが目的地かな?」

秋留が辺りを見渡しながら呟いた。確かに少し離れた所に小さな滝と川が見える。その川の水はここいらの草木に力を与えているようだ。

遠くから額に怒りマークを掲げたカリューが、全身ずぶ濡れになつて歩いてきているのが見える。獣人の姿のままのところを見ると、滝から流れる水は何の効果も発していないようだ。

「あの魔法医! だましやがったな!」

カリューは身体をブルブルと震わせ、身体中の毛が吸い取つてしまつた水を払つてゐる。いよいよ獣人街道まつしぐらといった具合だ。

「ゆつくりしている場合ぢやないよな。これからどうする?」

俺はビスケットを口に頬張つてゐる秋留に問い合わせた。

「この部屋では絶対、何か起きると思うんだけど。プレイブはどう思う?」

「そうだな……」

俺はそう言うと秋留の隣に腰掛け、小さい声で続けた。

「絶対に追跡者はいるはずなんだ。何か仕掛けてくるに違いない」

風に揺れて辺りの木々が揺れた。

「プレイブ!」

秋留が杖を構えて立ち上がつた。

俺も気づいてネカーとネマーを構えて立ち上がる。

その俺達の動作を見て気づいたのか、ジョットと三匹の獣人も戦闘体勢を取つた。

「洞窟の中に木々の葉が揺れる程の風は吹かないぞ」

俺は全員に注意を促す。

その時、俺達の近くにあつた木が大きく揺れて木の根っこが地面に飛び出した。

「な、何事ニヤ?」

動き出した木に一番近かつたクロノが後ずさる。

目の前の木の太い幹に一本横に切り込みが入つていく。

「こ、こいつはまさか……」

ジョットは身体をブルブルと震わせながらマジックレイピアを構えて言つた。

今や、一本の切り込みは一つの大きな口へと変化してゐた。

「マウスラフレシア!」

秋留が叫ぶ。

ジョットと銀星を亡き者へと変えた邪悪なモンスター。

この部屋中にある木々全てが、そのマウスラフレシアといふ事か！
「来るぞ！」

カリューの叫びと共に部屋中のマウスラフレシアが一斉に雄叫びを上げた。

『フオオオオオオオオ！』

野生的な咆哮にクロノ、シャイン、それにカリューまでもが怖氣づいた。

目の前のマウスラフレシアの太い枝がクロノに向かつて振り下ろされる。

俺はネカーをぶつ放し、その枝を粉碎した。

「ビビツてんな！ 次々襲つてくるぞ！」

震えている三人の獣人に向かつて怒鳴りつける。

俺の隣にいたジョットが、鬼の様な形相でマウスラフレシアにマジックレイピアを突き立てた。小さな爆音と共に一体のマウスラフレシアが木つ端微塵に吹き飛ぶ。

ジョットの持つマジックレイピアは魔力を込める事により、威力がアップするという珍しい武器だ。

「な、なんじやと！」

ジョットが小さく呻ぐ。

今、爆破したばかりのマウスラフレシアの根っこから小さな芽が出て、あつという間に周りの木と同じ大きさの樹木に成長した。

その成長したばかりの樹木の枝がジョットの身体を吹き飛ばす。

「火炎の王を守りしサラマンダーよ……」

続いて秋留が呪文を唱え始めた。その秋留に向かつて別のマウスラフレシアが根っこを器用に動かし歩を進める。

「ウニャー！」

クロノがマウスラフレシアの大きな口の上方に向かつてドロップキックをお見舞いした。

それに合わせて、シャインがマウスラフレシアの貧弱な根っこの大足を払う。

ドオン、という大きな音を立ててマウスラフレシアが倒れた。

「炎の槍となり我が意に従え……フレイムスピア！」

秋留が残りの呪文を詠唱し終わり、手近のマウスラフレシアに向かって炎の槍を突き立てる。

「フオオ……」

目の前でマウスラフレシアが燃え尽きた。

「やつたかな？」

秋留がメラメラと燃え尽き様としているマウスラフレシアから少し距離をとった。

しかし、燃え尽きた根っこから再びマウスラフレシアが急成長して秋留を襲つた。

「ウオオン！」

秋留を襲おうとしたマウスラフレシアの枝をカリューが鋭い爪で弾き飛ばす。

「こ、ここいら一帯のマウスラフレシアは何なんだ？」

そもそもマウスラフレシアにこんなに激しい再生能力があるとは聞いていない。実際、俺達が以前倒した事のあるマウスラフレシアには、こんな再生能力は無かつた。

「品種改良でもしたのかな？」

四方八方から襲つてくるマウスラフレシアの攻撃を、何とか避けたりブладードーが防御しながら秋留はかわしていく。

「とりあえず、三十三体つてところかな？」

俺はワラワラと動き出しているマウスラフレシアの数を数えた。まず何よりも先に、ここいらの弱点を見つけなくてはならない。

「け、剣ないのか？」

カリューが慣れない爪で必死にマウスラフレシア達の攻撃を捌きながら叫ぶ。

「これしかないぞ！」

俺は腰に装備していた黒い短剣を抜き出し、カリューに放り投げた。

「おう！　ないよりマシだ！」

カリューは俺から受け取った黒い短剣を右手に握り締めると、近くのマウスラフレシアを刻んでいった。

剣を持っているとあんなに動きが変わるんだなあ。

「うおっ！」

俺の目の前をマウスラフレシアの枝がかすめる。よそ見をしている場合じゃなかつた。

俺はネカーとネマーでマウスラフレシアの枝を打ち碎いたが、すぐ後から同じような枝が再生している。

「この洞窟と一緒にこいつらキリがないニヤン！」

シャインがクロノとの素晴らしい連携攻撃の合間に叫んだ。確かに何とかしないと、いつかはこちらの体力が尽きて負けてしまう。約一名、底なしの体力の奴がいるが。

「ウインドボム！」

後方では秋留がマウスラフレシアに向かつて呪文を唱えている。

「きやああ！」

どうやら、またしても魔法は効果が無かつたようだ。先程から秋留は色々な呪文をマウスラフレシアに向かつて唱えているが、どれも効果は得られないようだ。

「ちょっと観察」

俺はネカーとネマーで進路を切り開いて、マウスラフレシアのいない空き地まで走り抜けた。

その途中にいたクロノの腰にぶら下がっていた金袋をついでに押す。

「ん~」

俺は振り返り、仲間達の戦いを観察する。相変わらずジョットは怒りに任せてマジックレイピアに魔力を込めての攻撃を繰り返している。あんな戦い方じゃあ、いつか魔法力が尽きてしまうに違いな

い。

「ん！」

俺は一つ、思い出した。

俺達のパーティーには攻撃魔法が得意な秋留の他に、聖なる魔法である神聖魔法を唱えられる仲間がいる！

「ジェット！ 少し落ち着いて、神聖魔法を適当に試してみてくれ！」

俺の叫び声が何とか耳に入つたのか、ジェットはマジックレイピアを鞘に収めて魔法を詠唱し始めた。

「小鳥の囀り、川のせせらぎ……」

ジェットが渋い落ち着いた声で呪文を唱え始める。その隙を突いて後方からマウスラフレシアが攻撃を仕掛ける。それを俺は硬貨を詰めなおしたネカーとネマーで打ち碎いた。

「大地の恵み、この自然に溢れるガイアの力よ……」

更にジェットは呪文の詠唱を続ける。それを援護する俺。

神聖魔法は秋留が使っている攻撃系を主体としたラーズ魔法とは違い、詠唱中にあまり避けたり攻撃したりする動作は出来ない。

「この者の呪いを解きたまえ……」

ジェットの両手が淡く輝き始める。と同時にジェットの身体から白い湯気が立ち上った。

死人であるジェットは、その身体で神聖魔法を唱えようとすると自分自身にも影響を受けてしまう。だから滅多に神聖魔法は唱えない。今回は特別だ。

「浄化の光！」

ジェットが詠唱を終え魔法を発動させる。浄化の光は呪いを解く呪文だ。ジェットも呪われていると間違われて危うく死人としての人生を終えそうになつた事がある。

魔法の淡い光が対象のマウスラフレシアを包み込んだ。

しかし何の効果も無かつたらしく、光の中から飛び出した長い枝がジェットの身体を弾き飛ばした。

「ぐふう」

ジョットが肩膝を地面につける。追い討ちを掛ける様にマウスラフレシアの身体から伸びた数本の枝とツルがジョットを襲う。俺はマウスラフレシアの全てのツルと枝を打ち落とした。

「大丈夫か？」

「大丈夫ですじや。神聖魔法が少し身体に痛かつただけですじや」「ジョットが大きく息を吸つて立ち上がり、周りの敵をレイピアで軽く薙ぎ払つてから再び別の神聖魔法を詠唱し始めた。

「ガイアに存在する事を許されぬ者達に……」

死人の存在はガイアに許されるのか疑問に持ちながら、俺はジエットの援護を続ける。

「大いなるガイアの光によりその存在を打ち消したまえ……破邪の風！」

ジョットの目の前のマウスラフレシアが強くて赤い風塵に包まれた。と同時にその場から吹つ飛びジエット。

「ぬああああ」

空中を舞うジョットの叫び声が聞こえる。その身体からは白い湯気と共に灰が舞つていた。

「ああ！ ジエット！ 死人の癖して、そんな魔法使っちゃ駄目だよ

よ

宙を舞うジョットの方に駆け寄りながら秋留が言う。

地面上落ちてきたジョットにすかさず秋留がブツブツと呪文を詠唱し始める。

秋留が何の魔法を唱えようとしているのか聞き取れないが、辺りの空気が少し禍々しくなった事を考へるとネクロマンシーだろうか。俺はネクロマンシーの様な魔法は怖くて嫌いだ。

「もう大丈夫ですじや、助かりました」

ジョットがレイピアを杖代わりにして立ち上がる。杖をついているジョットの姿はどことなく様になつてている。

「プレイブもあんまりジエットに無理させないでよね！」

怒った秋留はそのまま軽い身のこなしとブレードーの攻撃の合間に色々と魔法を唱え始めた。

隣にジェットが歩いてくる。

俺は相変わらず少し離れた所から仲間達、主に秋留の援護を続けていた。

「何か分かりましたかな？」

「駄目だな。色々見ているんだけどイマイチ分からない」

ジェットは俺の意見を聞くと、こちらに向かつて進んでくるマウスラフレシア目掛けて再び神聖魔法を唱え始めた。

「我が神、ガイアよ、この者に癒しの力を……」

冒険者なら誰でも知っている様なポピュラーな魔法を唱え始める。

神聖魔法でも初級の初級、体力を回復させる魔法だ。

「癒合の霊！」

ジェットの突き出した両手からシャワーの様な光がマウスラフレシアを包み込む。

やはり何事も無かつたかの様に田の前のマウスラフレシアがジェットに攻撃を仕掛けてくる。

しかしその時、丁度俺がいる場所とは正反対の壁際の所でワラワラと動いているマウスラフレシアのうちの一匹が光った。今の光は癒合の霊の効果？

「ぬおう！」

俺が余所見をしているところに襲ってきたマウスラフレシアの枝を、ジェットが氣合と共に切り落としていた。

俺はジェットに礼を言つと、ネカーとネマーを構えて再び戦禍へと飛び込んだ。

目指すは癒合の霊の後に光ったマウスラフレシア。

しかし、目指すマウスラフレシアに近づこうとすると、一層敵からの攻撃が厳しくなる。俺は諦めて再び戦禍の中心から逃れた。

周りを見渡すと相変わらずカリュー、クロノとシャインのペアが全速力で戦っているが、どちらもかなりの傷を負つてきている様だ。

ジエットはともかく、秋留まで小さな傷を負いはじめている。

俺は再びジエットの隣に舞い戻り、小さく耳打ちする。

「また観察するから、暫く援護してくれ

「了解ですじゃ

俺はジエットに援護は任せた辺りに集中し始めた。

遠くのマウスラフレシアが癒合の薬の効果を受ける……。これはどういう事なのだろう。

それにあの奥のマウスラフレシア……。あまり俺達を襲ってくるような気配を見せない。逆に回りのマウスラフレシア達が壁際の奴の事を守っている様にも見える。

あいつが怪しいのは確かなのだが、それだけではこの洞窟を抜け出せる事は出来ない。

何とかしてこの洞窟の主を引っ張り出さなくては……。

集中するために瞑つていた眼を再び開ける。田の前ではジエットが怒涛の様にマウスラフレシアを切り刻んでいる。それ程の恨みがマウスラフレシアにはあるという事か。

「うにゃああああー！」

クロノの叫び声が響き渡った。どうやらマウスラフレシアの強烈な一撃を食らった様だ。クロノは左脇を抑えて呻いている。

「さつきから変な虫が飛んでて気が散るニヤ

虫？

そういえば、いつからか金色の虫と戯れているクロノの姿を田撃していたな。

俺はクロノが気にしている金色の虫を探すために眼に力を入れた。部屋をグルリと見渡すと丁度、秋留の後方に金色の虫が飛んでいたのが見えた。盗賊としての俺の眼に見えない物はない！

暫く虫の動きを追つていると、パーティのメンバーの傍を暫く浮遊してから次のメンバーの傍へと浮遊している。

俺はあまり金色の虫を凝視しないように無視しつつ仲間達の援護をする。

今、金色の虫は俺の横を浮遊している。

ネカーとネマーをマウスラフレシアに乱射しながら、視界を通り過ぎる金色の虫に集中する。

カメラ?

俺は動搖しない様にネカーとネマーでマウスラフレシアを攻撃し続けた。

金色の虫の頭はカメラの様な形をしていた。

魔族討伐組合では依頼を達成した事を証明するために、インスペクターという頭にカメラがついた妖精を貸してくれる。今の虫はまるでインスペクターの小型版の様だった。

金色の虫は俺達を監視しているのか?

なぜ?

それは、あの虫で俺達の洞窟の進み具合を監視して罠を作動させていたからだわ。

誰が?

マウスラフレシアが最終目的なら、洞窟の主の目的は高価な魔楽果……。

「なるほど」

俺はネカーとネマーを乱射しながら一人呟いた。

「何か分かったんですかな?」

肩で息をしながらジエットが小声で聞いたきた。全身がマウスラフレシアから浴びた茶色い返り血で染まっている。

俺は背中に背負っているバックから小さな玉を二個取り出した。「これをまた使ってみるか……」

バックの底の方にあつた小型の黒い物体も同時に取り出す。

準備を終えた俺はネカーとネマーを構えながら再三のチャレンジとなる戦渦へと飛び込んだ。

俺の意図を察したかの様に辺りのマウスラフレシアが一斉に攻撃を仕掛けてくる。

俺はネカーとネマーを構えて片手に持った小さな二個の玉を地面

に投げつけた。

地面に叩きつけられた玉が破裂して、辺り一面が真っ白い煙に包まれる。

「こらあああ！　プレイブ！　お前はいつも何かやる前に一言俺達に言ええええ！」

カリューが煙に覆われた中から大声を出す。

辺りの視界はゼロの筈なのに、マウスラフレシアの混乱した攻撃をかわして、俺が渡した短剣で切り刻んでいるのは野生の勘が成せる技か。

「こつちに来て」

俺は真っ白い煙で覆われた中で秋留の手をしつかりと掴んで、煙の外へと連れ出す。

「ちょっと、ムググ～」

秋留が叫び出すのを口を押さえて止める。

「聞いてくれ」

小声で話す俺の意図を察したのか秋留が黙つて頷く。カリューだつたらこつはいかないだろうな。

「つかぬ事を聞くようだけど、インスペクターの映像に幻を見せる事は可能？」

「インスペクターにはそういう詐欺が出来ないよ」ガードがかかっているの

「何でこつた！　俺の作戦は実行前から失敗か？」

俺の作戦を見抜いたのか、秋留がニヤリと笑いながら言う。

「でも小さな虫とかにはそんなガードかけれないはずだけど」

さすが秋留。元盗賊という事を差し引いても素晴らしい洞察力と理解力を持っている。

「幻想術以外には何も出来なくなるけど、大丈夫？」

「俺がしっかりフォローするから安心しろ！」

俺が男らしくガツッポーズで答える。

秋留も魔法の連発で疲れているはずなのに、笑顔で頷いてくれた。

暫くすると秋留が小声で何か言い始めた。

普通の攻撃魔法と違い、幻想術やネクロマンシーは呪文の詠唱の内容を聞き取る事は出来ない。

今まで白い煙の中で右往左往していた金色の虫が急に落ち着いて、その場をクルクルと回り始めた。さては秋留の幻想術に掛かつたに違いない。

「さてと」

俺は右手にネカー、左手にカバンの奥から取り出した真っ黒の丸い物体を握んで壁際に向かって走り出した。途中でマウスラフレシアの攻撃を右足に食らって倒れそうになるのを堪えて猛ダッシュする。

「チェックメイトだ」

俺は格好良く決め台詞を言つと、目的のマウスラフレシアの身体に上つて大きな口の中に小型の爆弾を放りこんだ。木つ端微塵に吹き飛べ！

「フオオオオ」

自分の危機を察したのか、爆弾を飲み込んだマウスラフレシアのツルが俺の左脚を握んだ。

「お前と心中なんて、まっぴらゴメンだな」

俺はネカーで左脚に巻きついたツルを打ち落とす。と同時に空中に向かつて大きく飛ぶ。

強大な爆発力で部屋の空気が振動した。爆風により俺が起こした白い煙が晴れる。俺は爆風で宙を舞いながら、眼を細めて吹き飛んだマウスラフレシアの方を見た。

爆発の中心に真っ黒い果実が見える！ しかもその果実の元に吹き飛んだ木片やツルが集まりつつあった。

俺はネカーとネマーを構えてトリガを引いた。「カチン」と軽い音が両方の銃から聞こえる。玉切れだ！

尚も宙を舞いながら辺りを見渡すと一番近くにカリューがいるのが見えた。カリューは小型爆弾により発生した爆風から既に立ち直

つて いるよ うだ。

「カリュー！ 爆風の中心の黒い果実！」

大 声 で 叫 ぶ。

黒い果実の周りには次々と散つていったはずの木片が集まつてい
る。並みの再生力ではない。おそらく、この部屋全てのマウスラフ
レシアと黒い果実を持つマウスラフレシアはつながつていたのだろ
う。

カリューは口に黒い短剣を加えて四本足で大地を蹴つた。普段の
カリューの素早さの一倍はありそうだ。

ダッシュの途中でカリューは両手で短剣を構えた。

「ウオオオオオオン！」

獣人と化したカリューの雄叫び。

カリューが突き出した短剣は見事に黒い果実を貫いていた。

今までクロノやシャイン、ジョットを襲つていたマウスラフレシ
アが一斉に枯れ落ちる。

「ニヤン？」

シャインは繰り出した蹴りが空しく宙を舞つて いるのに疑問を持
つて いるようだ。

「ニヤン？」

クロノの左手の突きも風を切る。

「終わつたんですかな？」

マジックレイピアを構えてジェットが聞いてくる。

「いや、まだだ」

俺は地面に落下した時に痛めた左肩を押さえつつ秋留に近づいて
いつた。

「秋留、呪文中でも会話は出来るのかな？」

秋留はブツブツと呪文を発しながら小さく頷いた。

「金色の虫に、俺達がマウスラフレシアに食われて魔楽果が生つて
いる幻を見せられるか？」

再び秋留は頷く。内容は分からぬが、今までの呪文とは少し違

う感じでブツブツと喋り始める。

さて、この洞窟の主が出てくるまでどれ位の時間が掛かるだろ

か。

俺はその間に仲間達に対してもウスラフレシアと金色の虫についての説明を行つた。

「へへ、プレイブ凄いニヤ」

「同じ盗賊として見習わないといけないニヤン」

クロノとシャインが関心して言つ。

全員への説明を終えて俺は一人魔法を唱え続けている秋留の方を見る。あまり表情を顔に出さないが、魔法を唱え続けているせいで、相当疲れているに違いない。

生憎、魔法力を回復させるよつたアイテムは持っていないため、ただ見守る事しか出来ない。

この洞窟の主には早々に登場してもらいつ必要がある。

「で、黒幕は誰なんだ？」

脳みそも筋肉で出来ていそうなカリューが聞く。自分で考える気があるのであらうか。

答えようとした時に、壁の向こうから何者かが近づいてくる気配を感じた。

「黒幕登場の様だぞ。カリュー、つられて来てくれ」

俺は小声で秋留を念めて全員に言つと、気配を殺しつつ壁際に近づいた。壁に耳を当てるに明らかに人の近づいてくる足音が聞こえる。

壁際を調べながら歩くと、洞窟の中を流れる川岸の岩壁に扉らしきものを発見した。どうやら、壁の後ろの通路はここに繋がっているらしい。

壁の向こうの阿呆は陽気にスキップしながら近づいてくる。お仕置きタイムが待っているとは知らずに。

暫くすると目の前の岩壁が音を立てて開いた。岩壁の影で待ち構えていたカリューが出てきた五十歳位の男のみぞおちに拳を叩き込

む。

「ぐつー！」

腹を押さえてうずくまつた男を手早くロープで縛り上げると、仲間の待つ場所まで引きずつていった。

「秋留、お疲れ」

魔法を唱え続けていた秋留に声を掛ける。俺の声を聞いた秋留は「ふう〜」と大きく息を吐くと、今まで瞑っていた眼を開いて俺の引きずつている男を睨みつけた。

「どうしてくれようか……」

秋留が魔法のロッドを頭上でグルグルと回す。

「やはり、魔法医のジジイでしたか」

ジエットも男を睨みつけて言った。ジエットの死臭が漂つて来たのか、魔法医のドルイドは顔をしかめる。

「ど、どうしてなのよ！ 映像ではしつかりとやつつけられて、マウスラフレシアの木に生る一杯の魔楽果が……」

そう言ってドルイドは辺りを見回す。

「い、いない！ あたしのマウスラフレシアちゃん達が！」

いい歳をしたドルイドが泣きそうな顔で言つ。

「日当たりが悪かったから切り倒したニヤン」

シャインが初対面のドルイドを見下ろす。シャインの眼にも憎悪の炎が見える。

「アホな事言つてんじやないわよ！ 」のバカネコー！」

「シャツ」

シャインの爪がドルイドの頬に五本の傷を作つた。

ドルイドは「あたしの美しい顔を」やら「見てらっしゃい」等と怒鳴つているが、どれも負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

「とりあえず、黙つてもらおつか

何事も忘れずに根に持つ秋留がドルイドの前に出た。

「な、何をするつもり！」

身体をロープで縛られて身動きの取れないドルイドは、唾を飛ば

して秋留を牽制している。こいつはガキか……。

秋留は少し離れると真っ赤なマントが大きく揺れ、鋭い爪となつてドルイドに襲い掛かった。

声にならないドルイドの叫び。

「半分位いいつて良いよ」

秋留が言つと、ブラードーはドルイドの身体に巻きついた。「ドクン、ドクン」と言つ不気味な音が聞こえてくる。

ちなみに人間は半分の血を抜かれて生きていけるのだろ?か……と疑問に思いながら見守る。

暫くすると、ブラードーは秋留の背中へと戻つていった。残されたドルイドは心なしか以前よりも瘦せこけた様に見える。

「引きずるのも楽になつたし、こいつが出てきた通路から地上に戻るか!」

俺は大声で叫ぶとドルイドを引っ張つて歩き出した。

『お~~~~!』

仲間達はやつとの洞窟から解放される喜びを表す様に元気に答えた。

Hプローグ

ドライブが入って来た通路を暫く歩くと、小さな部屋に行き着いた。

そこには一組のテーブルと椅子があり、テーブルの上には小さなモニターが置いてある。どうやら金色の虫の映像はこのモニターに表示されていたようだ。

近くにあつた戸棚の中に食料やらしちょっとした魔法のアイテムが入っていたため、仲間達にばれないように拝借する。

洞窟の管理者用の通路に罠など仕掛けられている筈などないが、小部屋を出た後も念のため、俺が先頭を歩いた。

少し歩くと、あつという間に外の明かりが見えてきた。この洞窟は相当グネグネと曲がっていたようだ。

俺達は洞窟の入り口とは別の場所に出たが、周りを確認すると銀星がへ口へ口の雄馬一頭と馬車を引いて走つてくるのが見えた。銀星の耳は盗賊並みか？

「ヒヒーン、ヒヒーン、ヒヒヒーン！」

銀星が騒いでいる。一体、何を言つているのだろう。

「一日も帰つてこないから心配した、と言つている」ヤ

クロノが後ろでボソリと呟く。獣人は動物と会話が出来るらしい。

初めて知った。

「へへ、一日も掛かったのか。どうりで疲れたわけだ」

あまり疲れていなさそうなカリューが言う。カリューは獣人の癖に銀星の言葉は分からぬようだ。やはり純正品ではないからどうか。

「腹も減つてるみたいだ二ヤン。後ろの雄馬もへバつてる二ヤン」

シャインに言われて秋留が荷台から銀星と雄馬の食事を取り出すと、二頭は鬼の様に餌を食べ始めた。

「ワシらも少し休憩しませんかな？」

太陽の位置からすると睡前だろうか。俺達は荷台や地面に座つたりしながら、全員で仲良く食事をし始めた。

「このはどうするんだ?」

いい加減保存食に飽きたが、後少しで港町の美味しい料理を食べられる事を期待して、干し肉をかじりながら言つ。

「あたし達は盗賊団と合流して、また盗賊稼業に戻るニヤン」

シャインの台詞に少し考えながらカリューが答えた。

「お前らの強さなら、普通に冒険者をやつてた方が十分に金を稼げると思うけどな」

カリューらしくない説得力のある良い台詞だ。

カリューの台詞にシャインもクロノも眼を見合させて照れている。これで獣人盗賊団は解散という事になるのだろうか。

「私達はドルイドを港町の治安維持協会に引き渡してから、カリューの獣人化を何とかするために、別の大陸に渡るうか?」

秋留の言葉にカリューが「あつ」と小さな声を上げて自分の頭に生えている耳を触つたり、身体中の青い毛並みを触つたりした。どうやら、自分が獣人化している事を忘れていたようだ。

人間、慣れと言つものは怖い。

ちなみに治安維持協会とは人間同士の犯罪などを取り締まる協会だ。魔族討伐組合とは対象にする相手が違うと言つたところか。

「じゃあ、そろそろ出発するか!」

カリューが元気に言つ。獣人化を治したいという気持ちがまた復活したようだ。

「僕達のアジトはこいつちだニヤ」

「冒険者としてどこかで会つたら、その時はまた一緒に冒険しようニヤン」

クロノとシャインは手を振りながら言つと、俺達とは反対の方向へ走り出した。あいつら最期まで元気一杯だったなあ。

食事を済ませた俺達は一頭の引く馬車に揺られて港町ヤードを目指して進んだ。

「ああ、そうだ。ブレイブから借りた短剣返しておぐぞ」

俺はカリューから短剣を受け取った。モンスターからの返り血に
より色が少しおかしくなっている。宿屋に着いたら少し磨いたほう
が良さそうだな。

俺は腰の鞘に短剣を戻した。

……あれ？ 短剣のサイズが合わない。モンスターの返り血が固
まって少し大きくなつたかな？

俺は深く気にせず背中の鞘のサイズを調整して短剣を収めた。

「町に着いたら、美味しい飯を一杯食うぞー！」

俺の叫びに他のメンバーが答える。

俺達の長い洞窟探検はこうして終わりを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0332d/>

盗賊プレイブ@獣ウィルス蔓延中

2010年10月8日14時48分発行